

「食の安全意識に関する調査」

2006 年 3 月

財団法人 塩事業センター

～ 目 次 ～

I. 調査の概要	2
1. 調査の目的	2
2. 調査の枠組	2
3. 調査方法等	2
4. 調査の実施	3
5. 回答者の属性	3
注記 - 調査の主体について	4
II. 調査の結果 - 食に対する安全・安心と危険・不安	5
1. 食に対する安全・安心と危険・不安	5
食に関する安全・危険判断	5
食に対する安心・不安感情	13
食に関する安全・危険判断と食に対する安心・不安感情の関係	15
まとめ	17
2. 食に関する知識・情報	18
食に関する知識	18
食に関する情報源	21
使用・信頼情報源と食に関する知識	29
食に関する知識と食に関する安全・危険判断	31
食に関する知識と食に対する安心・不安感情	32
まとめ	35
3. 食に関する信頼	36
食に関する事業者等への信頼	36
食に関する事業者等への信頼と食に関する安全・危険判断	38
食に関する事業者等への信頼と食に対する安心・不安感情	40
まとめ	41
4. 食に対する安心・不安感情の規定因	41
III. 調査の結果 - 食品の購買行動	45
1. 食品の購買行動の実態	45
2. デモグラフィック要因との関連	46
3. 食品の購買行動の規定因	48
まとめ	50

I. 調査の概要

1. 調査の目的

近年、BSE 問題や食品表示の偽装事件など、食品の安全性に関する事件・事故が続いており、これらを受けて、消費者は、食の安全性に対して強く疑いを感じるようになってきていると考えられる。

また、当センターが平成 14 年度に実施した『家庭用塩の消費実態に関する調査』では、家庭用の「塩」についても、消費者は、商品選択に当たって「品質が安心である」ことを最も重視していることが明らかとなった。

しかし、食の安全性に関する意識の実態や、この意識がどのような要因によりもたらされているか、あるいはこの意識が食品の購買行動にどのような影響を与えているか等については、必ずしも明らかにされていないと考えられ、これらを明らかにすることは、単に「塩」に関してだけではなく、広く社会的に有益な知見をもたらすと考えられた。そこで、以下の枠組みで、調査を実施することとした。

2. 調査の枠組

食の安全性に関する意識について検討するため、以下のように調査の枠組みを設定した。

- ・ 食の安全性に関する意識には、「安全・危険」という判断と、「安心・不安」という感情の 2 つの様相がある。
- ・ 食に関する科学的知識の有無が、食に対する「安全・危険」判断や、食に対する「安心・不安」感情に影響を与える。さらに、使用している情報源や信頼している情報源が、食に関する科学的知識の有無に影響を与える。
- ・ 食に関する科学的知識のほかに、食品を供給している事業者や、食品の安全性を管理している行政等に対する信頼も、食に対する「安全・危険」判断や、食に対する「安心・不安」感情に影響を与える。
- ・ 食に対する「安全・危険」判断や、食に対する「安心・不安」感情が、具体的な食品の購買行動に影響を与える。
- ・ これらの要因のそれぞれは、デモグラフィック要因による影響を受ける。

3. 調査方法等

今回の調査方法等は、以下のとおりである。

- ・ 調査方法：郵送調査法
- ・ 調査対象者：全国の 18 歳から 69 歳までの男女
- ・ 標本抽出方法：層化 3 段無作為抽出法により、住民基本台帳から 3,000 名を抽出
- ・ 層化基準；
 - 大都市：東京 23 区及び政令指定都市
 - 市部：大都市以外の市制施行地
 - 郡部：町村制施行地

なお、人口は平成 16 年 3 月 31 日時点の住民基本台帳人口を、また市町村の区分は平成 16 年 10 月 31 日時点のものを使用した。

4. 調査の実施

以下のとおり、調査を実施した。

- ・ 調査日程：2005 年 2 月 25 日～3 月 31 日
- ・ 有効回収票：944 票（回収率 31.5%）

なお、没票は 29 票、住所不明による戻り票は 35 票であった。

5. 回答者の属性

有効回答者 944 名の属性は、以下のとおりであった。

- ・ 性別；

区分	回答者数	構成比
男性	372	39.4%
女性	571	60.5%
無回答	1	0.1%

- ・ 年齢；

区分	回答者数	構成比
29 歳以下	137	14.5%
30～39 歳	134	14.2%
40～49 歳	198	21.0%
50～59 歳	250	26.5%
60～69 歳	224	23.7%
無回答	1	0.1%

- ・ 最終学歴；

区分	回答者数	構成比
小中学校	92	9.7%
高等学校	397	42.1%
各種学校・専修・(専門)学校・ 高等専門学校・短期大学	236	25.0%
大学・大学院	202	21.4%
その他・無回答	17	1.8%

- ・ 所属階層意識；

区分	回答者数	構成比
上	56	5.9%
中の上	232	24.6%
中の中	357	37.8%
中の下	172	18.2%
下	124	13.1%
無回答	3	0.3%

注記 - 調査の主体について

本調査は財団法人 塩事業センターと、早稲田大学文学学術院・竹村和久教授、筑波大学人間総合科学研究科・松井豊教授の協同で実施したものである。

調査の設計及び解析は、竹村教授、松井教授、当センターのほか、宇井美代子（筑波大学大学院教育研究科準研究員）、高橋尚也（筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科）、磯部綾美、久富哲兵（早稲田大学大学院文学研究科修士課程）の各氏と協同で実施した。

本調査の結果の一部については、これまでに、以下のとおりに発表されている；

- ・ 竹村和久ほか（2005）安心と不安の社会心理（ ） - 調査の概要 -
- ・ 宇井美代子ほか（2005）安心と不安の社会心理（ ） - 社会不安・生活不安の構造 -
- ・ 大庭剛司ほか（2005）安心と不安の社会心理（ ） - 食に対する安心・不安と知識 -
- ・ 久富哲兵ほか（2005）安心と不安の社会心理（ ） - 意思決定スタイルと信頼との関連性 -

（以上は『日本社会心理学会第46回大会論文集』所収）

- ・ 磯部綾美ほか（2005）意思決定における後悔・追及者尺度の開発（『第7回日本感性工学会予稿集』）

以下では、適宜、上の各論文の内容を再掲、また利用している。また、以下の内容は、竹村教授、松井教授の監修を受けたものである。

II. 調査の結果 - 食に対する安全・安心と危険・不安

1. 食に対する安全・安心と危険・不安

1 では、食の安全性に関する意識の 2 つの様相として考えられた、食に関する「安全・危険」判断及び食に対する「安心・不安」感情の実態や、これらとデモグラフィック要因との関連、またこれら相互の関係について検討する。

食に関する安全・危険判断

回答者の食に関する安全・危険判断の実態を把握するため、まず、各種の食品について、「以下の食品に関して、あなたが普通に飲んだり食べたりする限り、『安全だ』と思うのはどれですか。あてはまるもの全てに○をつけてください(M.A.)」という質問を行なった。

表1 食に関する安全判断	
項目	選択率(%) N=939
13. 自然塩	71.5
8. 国産牛肉	66.1
2. ミネラルウォーター	65.9
3. 有機栽培の野菜	63.4
1. 水道水	47.8
12. いわゆる「健康食品」	34.0
14. 精製塩	30.2
6. 遠海魚介類	26.2
5. 養殖魚介類	24.3
9. カップラーメン	23.2
10. コンビニエンスストアの弁当	18.1
15. 化学調味料	13.8
16. 焼き魚の焦げ	11.7
7. 輸入牛肉	11.0
4. 輸入冷凍野菜	7.1
11. 遺伝子組換え食品	3.2
17. この中にあてはまるものはない	4.9

回答者に最も「安全だ」と思われていたのは「自然塩」(71.5%)であり、以下「国産牛肉」(66.1%)、「ミネラルウォーター」(65.9%)、「有機栽培の野菜」(63.4%)が、6割超の選択率であった。

一方、最も「安全だ」と思われていなかったのは「遺伝子組換え食品」(3.2%)であり、続いて「輸入冷凍野菜」(7.1%)が、1割未満の選択率であった。

また、危険判断の実態を把握するため、各種の食品について、「では、食べると『何となくこわい』とか『危険かもしれない』と感じるものはどれですか。あてはまるものすべてに○をつけてください(M.A.)」という質問を行なった(選択肢は安全判断についての設問と共通である)。

表2 食に関する危険判断

項目	選択率(%) N=944
11. 遺伝子組換え食品	75.6
7. 輸入牛肉	69.8
4. 輸入冷凍野菜	67.1
16. 焼き魚の焦げ	56.5
15. 化学調味料	46.8
9. カップラーメン	35.9
10. コンビニエンスストアの弁当	29.4
5. 養殖魚介類	27.4
1. 水道水	25.6
6. 遠海魚介類	19.4
12. いわゆる「健康食品」	16.2
14. 精製塩	12.2
8. 国産牛肉	8.1
2. ミネラルウォーター	6.8
3. 有機栽培の野菜	4.6
13. 自然塩	2.5
17. この中にあてはまるものはない	1.7

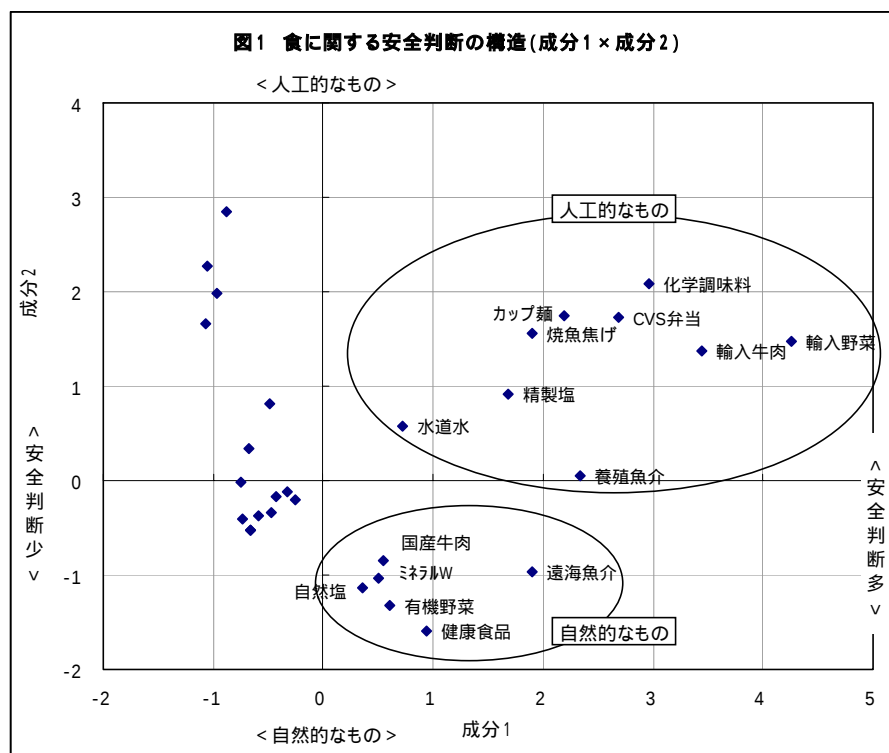
回答者に最も「危険かもしれない」と思われていたのは「遺伝子組換え食品」(75.6%)であり、以下「輸入牛肉」(69.8%)、「輸入冷凍野菜」(67.1%)が、6割超の選択率であった。

また最も「危険かもしれない」と思われていなかったのは「自然塩」(2.5%)であり、続いて「有機栽培の野菜」(4.6%)、「ミネラルウォーター」(6.8%)、「国産牛肉」(8.1%)が、1割未満の選択率であった。

以上の結果から、回答者に最も「安全だ」と思われている食品と最も「危険かもしれない」と思われていない食品(「自然塩」)が共通していること、また、最も「安全だ」と思われていない食品と最も「危険かもしれない」と思われている食品(「遺伝子組換え食品」)が共通していることが明らかとなった。

また、「安全だ」と思われることの多い「食品」は「危険かもしれない」と思われることが少なく、「安全だ」と思われることの少ない食品は「危険かもしれない」と思われることが多い傾向があることが確認された。

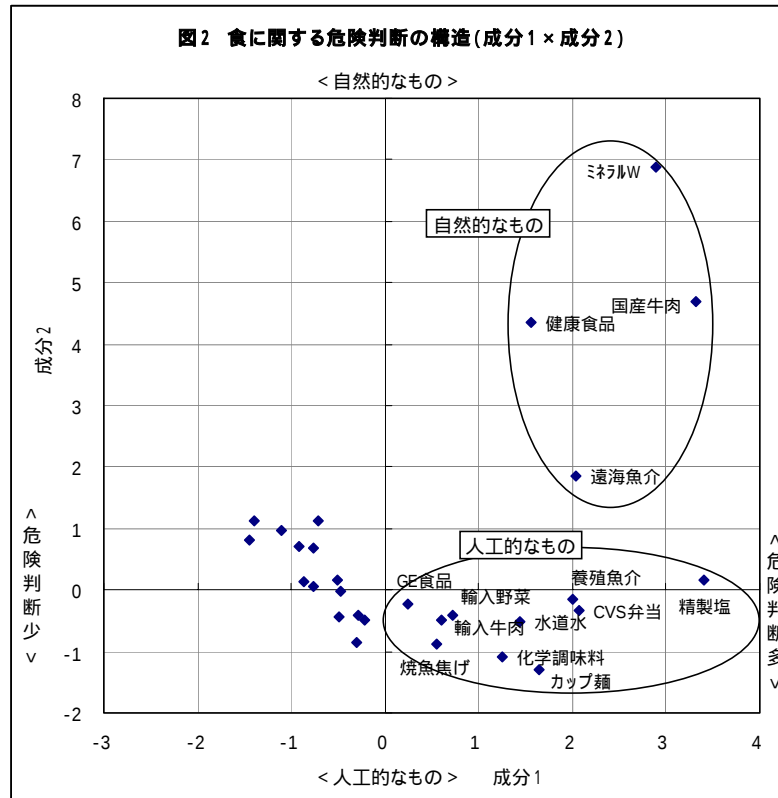
食に関する安全判断の構造を検討するため、選択率が5%以上の項目について、各項目を選択した場合に2点、選択しなかった場合には1点を与えて得点化し、数量化理論第Ⅱ類(以下「数量化Ⅱ類」と表記)による分析を行なった(固有値は、成分1=.31、成分2=.10)。



成分1は、値が大きいほど「安全だ」と思うものが多いことを示すサイズファクターであると解釈された。

成分2は、「自然的なもの(-) - 人工的なもの(+)」を弁別していると解釈された。また、「自然的なもの」に含まれた項目の多くは、表1に示したように、「安全だ」と思うものとして選択される率が高かった。したがって、「自然的なもの」は、安全だと思われることが多い傾向があることが明らかとなった。

危険判断について、安全判断と同様に、選択率が5%以上の項目について、各項目を選択した場合に2点、選択しなかった場合に1点を与えて得点化し、数量化Ⅱ類による分析を行なった(固有値は、成分1=.22、成分2=.10)。



選択したことを示すカテゴリースコアのみラベルを付した。

成分1は、値が大きいほど「危険かもしれない」と思うものが多いことを示すサイズファクターであると解釈された。

成分2は、「人工的なもの(-) - 自然的なもの(+)」を弁別していると解釈された。また、「人工的なもの」に含まれた項目の多くは、表2に示したように「危険かもしれない」と思うものとして選択される率が高かった。したがって、「人工的なもの」は危険かもしれないと思われることが多い傾向があることが明らかとなった。

以上をまとめると、「安全だ」と思われることの多い食品は「危険かもしれない」と思われることが少なく、また「安全だ」と思われることの少ない食品は「危険かもしれない」と思われることが多い傾向があった。

また、食品を「安全だ」「危険かもしれない」と判断する場合について、「自然的なもの」は安全だと思われることが多く、危険かもしれないと思われることが少なかった。逆に「人工的なもの」は安全だと思われることが少なく、危険かもしれないと思われることが多かった。

したがって、食品の安全・危険判断には、その食品が「自然的なもの」とであると判断されているかどうかに関与している可能性が示唆された。

安全判断とデモグラフィック要因との関連について検討するため、数量化 Ⅱ 類による成分1、成分2を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を説明変数とする数量化理論第 Ⅱ 類(以下「数量化 Ⅱ 類」と表記)による分析を、それぞれ行なった(成分1: $R^2=0.07$ 、成分2: $R^2=0.05$)。

表3 安全判断の成分1に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	.09	.06	.09	.06	.05
	女性	553	-.04	-.04			
年代	20代以下	136	.36	.32	.50	.22	.20 **
	30代	134	.33	.31			
	40代	196	-.08	-.09			
	50代	237	-.18	-.18			
	60代	215	-.13	-.12			
学歴	小中卒	91	-.17	-.06	.17	.12	.06
	高卒	391	-.09	-.05			
	専・短大卒	235	.07	.01			
	大・院卒	201	.20	.11			
所属階層意識	上	56	-.19	-.25	.41	.10	.10 **
	中の上	225	.12	.08			
	中の中	351	-.06	-.06			
	中の下	171	-.03	-.01			
	下	115	.15	.16			
全体		918					
重相関係数		.26	定数項	.01			
重相関係数の2乗		.07					

**p<.01

表4 安全判断の成分2に対する数量化 類による分析結果

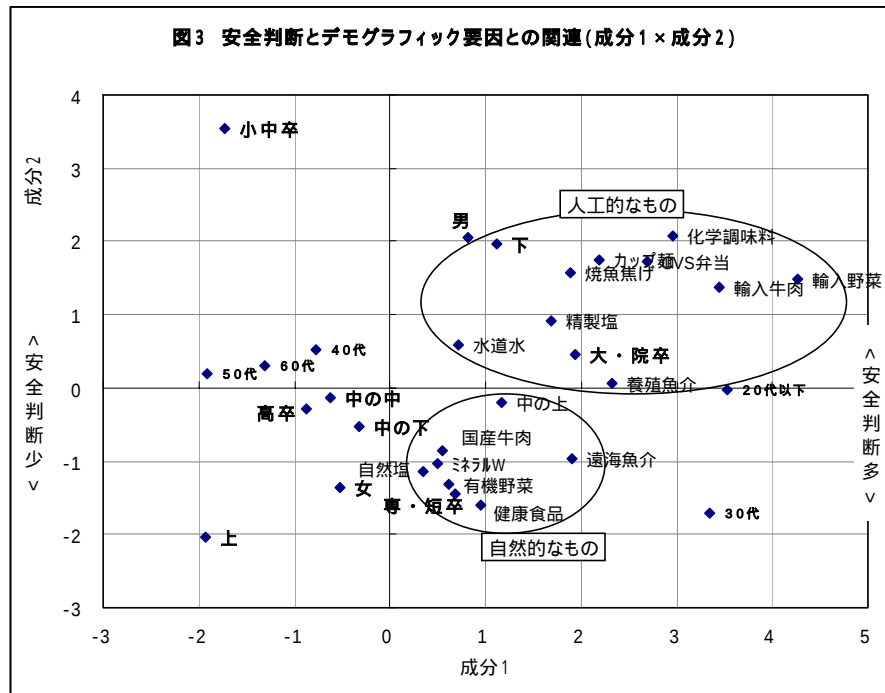
アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	.19	.18	.30	.16	.15 **
	女性	553	-.14	-.12			
年代	20代以下	136	.01	.06	.21	.05	.08 *
	30代	134	-.17	-.10			
	40代	196	.05	.11			
	50代	237	.02	.02			
	60代	215	.00	-.10			
学歴	小中卒	91	.35	.38	.48	.13	.13 **
	高卒	391	-.04	-.02			
	専・短大卒	235	-.14	-.10			
	大・院卒	201	.04	-.02			
所属階層意識	上	56	-.20	-.16	.31	.09	.07 *
	中の上	225	-.03	-.01			
	中の中	351	-.01	.01			
	中の下	171	-.05	-.05			
	下	115	.20	.15			
全体		918					
重相関係数		.23	定数項	-.01			
重相関係数の2乗		.05					

**p<.01、*p<.05

成分1については、年代(.20)及び所属階層意識(.10)の偏相関係数が有意であった。

また成分2については、性別(.15)、学歴(.13)、年代(.08)及び所属階層意識(.07)の偏相関係数が有意であった。

成分1または成分2について偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、その水準ごとに成分1及び成分2のサンプルスコアの平均値を算出し、安全判断のカテゴリースコアとともにプロットした。



選択したことを示すカテゴリースコアのみをプロット。
平均値は10倍して表記。

数量化 Ⅱ 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、成分1のt検定及び多重比較による検定を行なった結果、30代以下の層は40代以下の層よりも成分1のサンプルスコアが高かった。

また女性は男性よりも、高校卒、専門学校・短大卒の層は小中学校卒の層よりも、成分2のサンプルスコアが高かった。

以上の結果から、30代以下の層は40代以上の層よりも「安全だ」と思うものが多いことが明らかとなった。また女性は男性よりも、高校卒、専門学校・短大卒の層は小中学校卒の層よりも、「自然的なもの」を安全だと思っていることが明らかとなった。

また多重比較による検定の結果は有意ではなかったが、数量化 Ⅱ 類による分析の結果、学歴が高い層ほど、また所属階層意識が低い層ほど、成分1のサンプルスコアが高い傾向があった。この結果から、学歴が高い層ほど、また所属階層意識が低い層ほど「安全だ」と思うものが多い傾向があることが明らかとなった。

次に、危険判断とデモグラフィック要因との関連を検討するため、危険判断の成分1及び成分2を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を説明変数とする数量化 Ⅱ 類による分析を、それぞれ行なった(成分1: $R^2=.04$ 、成分2: $R^2=.05$)。

表5 危険判断の成分1に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	366	-.17	-.18	.29	.14	.15 **
	女性	557	.12	.12			
年代	20代以下	136	-.14	-.21	.33	.06	.11 **
	30代	134	-.06	-.12			
	40代	198	.05	.02			
	50代	237	.05	.06			
	60代	218	.03	.12			
学歴	小中卒	91	-.18	-.27	.38	.07	.11 **
	高卒	395	-.02	-.05			
	専・短大卒	236	.11	.10			
	大・院卒	201	.01	.11			
所属階層意識	上	56	.29	.26	.31	.08	.08 *
	中の上	228	.01	-.01			
	中の中	352	-.04	-.06			
	中の下	171	.06	.07			
	下	116	-.09	-.04			
全体		923					
重相関係数		.21	定数項	.00			
重相関係数の2乗		.04					

**p<.01、*p<.05

表6 危険判断の成分2に対する数量化 類による分析結果

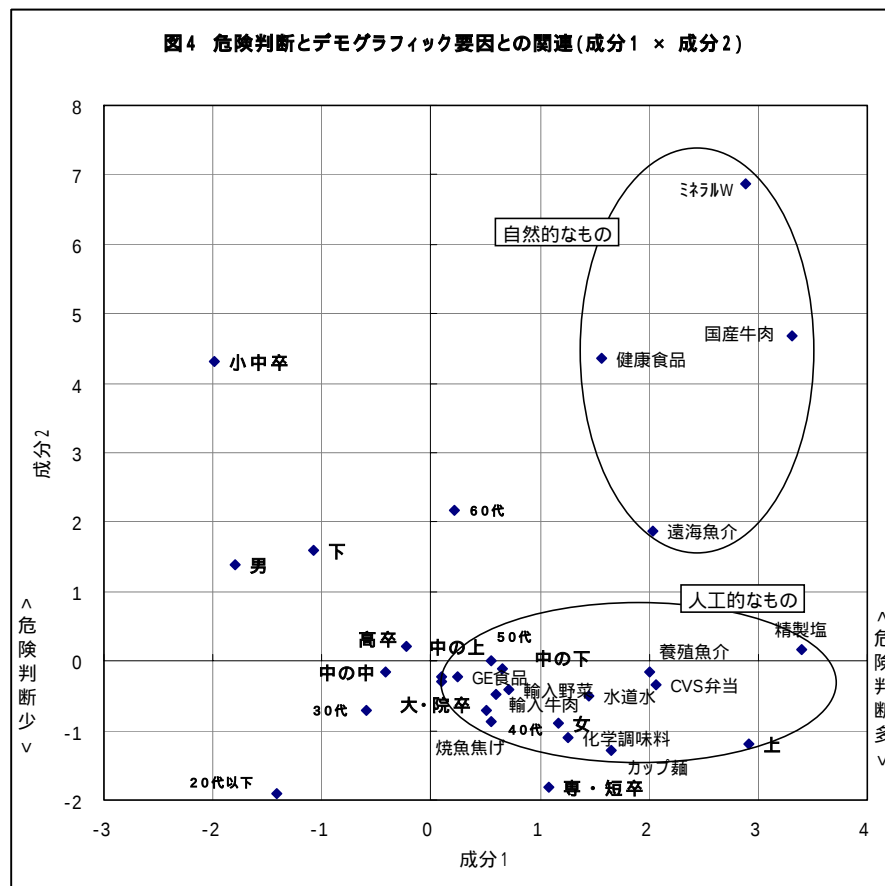
アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	366	.14	.13	.21	.11	.10 **
	女性	557	-.09	-.08			
年代	20代以下	136	-.19	-.13	.26	.14	.08 *
	30代	134	-.07	-.02			
	40代	198	-.07	-.03			
	50代	237	-.01	-.01			
	60代	218	.23	.13			
学歴	小中卒	91	.43	.33	.45	.16	.11 **
	高卒	395	.02	.02			
	専・短大卒	236	-.18	-.11			
	大・院卒	201	-.03	-.05			
所属階層意識	上	56	-.12	-.07	.17	.06	.04
	中の上	228	-.01	.01			
	中の中	352	-.02	-.01			
	中の下	171	-.02	-.04			
	下	116	.16	.09			
全体		923					
重相関係数		.21	定数項	.00			
重相関係数の2乗		.05					

**p<.01、*p<.05

成分1については性別 (.15)、学歴 (.11)、年代 (.11) 及び所属階層意識 (.08) の偏相関係数が有意であった。

また成分2については、学歴 (.11)、性別 (.10) 及び年代 (.08) の偏相関係数が有意であった。

成分1または成分2について偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、その水準ごとに成分1及び成分2の平均値を算出し、危険判断のカテゴリースコアとともにプロットした。



選択したことを示すカテゴリースコアのみをプロット。
 平均値は10倍して表記。

数量化 Ⅱ 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、t 検定及び多重比較による検定を行なった結果、女性は男性よりも成分1のサンプルスコアが高かった。

また高校卒以上の学歴の層は小中学校卒の層よりも、女性は男性よりも、また20代以下及び40代の層は60代の層よりも、成分2のサンプルスコアが低かった。

以上の結果から、女性は男性よりも「危険かもしれない」と思うものが多いことが明らかとなった。また高校卒以上の学歴の層は小中学校卒の層よりも、女性は男性よりも、また20代以下及び40代の層は60代の層よりも、「人工的なもの」を危険かもしれないと思っていることが明らかとなった。

また多重比較による検定の結果は有意でなかったが、数量化 Ⅱ 類による分析の結果、年齢の高い層ほど、また所属階層意識が高い層ほど、成分1のサンプルスコアが高い傾向があった。この結果から、年齢の高い層ほど、また所属階層意識が高い層ほど、「危険かもしれない」と思うものが多い傾向があることが明らかとなった。

以上をまとめると、女性は男性よりも、「自然的なもの」を安全だと、「人工的なもの」を危険かもしれないと思っていた。

年齢の低い層ほど、「安全だ」と思うものが多く、「危険かもしれない」と思うものが少ない傾向があった。

小中学校卒の層は「自然的なもの」を安全だと思うことが少なく、また「人工的なもの」を危険かもしれないと思うことが少なかった。

所属階層意識が高い層ほど、「安全だ」と思うものが少なく、「危険かもしれない」と思うものが多い傾向があった。

食に対する安心・不安感情

回答者の食に対する安心・不安感情の実態を把握するため、「以下に食品に対する意見があげられています。あなたもそのように思われますか。そのように思われる程度のところを○をひとつだけつけてください」という4件法（「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」）の質問を行なった。

それぞれの項目について、「そう思う」に4点、「ややそう思う」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を与えて得点化し、因子分析を行なった。

表7 食に対する安心・不安感情に関する因子分析結果(主成分バリマックス法)

項目	科学技術による食品への不安感情	自然系食品への安心感情	項目平均値
4. 抗生物質入りのエサで育った家畜の肉を食べるのは、何となく不安だ	.81	.08	3.26
3. 農薬を使った野菜を食べるのは、何となく不安だ	.77	.19	3.05
2. 添加物が入った食品は、食べるのが心配だ	.76	.18	2.93
5. 輸入されている食品の中には、安心できないものがある	.68	-.06	3.60
6. 遺伝子組換え食品を食べるのは、何となく不安だ	.65	.00	3.43
9. 「自然」と名がつく食品なら安心して食べられる	.02	.80	2.13
1. 自然食品店で売っている食品なら安心して食べられる	.07	.78	2.63
7. 有機栽培の野菜は安心だ	.12	.72	2.81
8. 水道水よりもミネラルウォーターの方が安心だ	.06	.67	2.69
回転後の寄与率(%)	30.39	25.42	
α係数	.79	.73	
尺度平均値	3.25	2.57	

その結果、2因子が抽出された（累積寄与率 55.81%）。第1因子は「科学技術による食品への不安感情」、第2因子は「自然系食品への安心感情」と命名された。

それぞれの因子に含まれた項目の得点を単純加算し、項目数で除した値を尺度得点とした（得点が高いほど、当該の感情が高いことを表す）。両尺度について、Cronbachのα係数を算出したところ、十分な信頼性が確認された（科学技術による食品への不安感情α=.79、自然系食品への安心感情α=.73）。

「科学技術による食品への不安感情」尺度得点の平均値は3.25、「自然系食品への安心感情」尺度得点の平均値は2.57であり、いずれも理論的中間点（2.50）を有意に上回っていた。

以上をまとめると、現代日本における食に対する安心・不安感情として、「科学技術による食品への不安感情」と、「自然系食品への安心感情」が抽出された。現代日本では、「科学技術による食品に対する不安感情」は、非常に高いことが明らかとなった。

また、「自然系食品への安心感情」の各項目の内容を詳しく検討すると、例えば「水道水よりもミネラルウォーターの方が安心だ」と思われていたが、実際には、水道水の方がミネラルウォーターよりも安全性に関する基準が厳しく（2 - の表 11 参照）、必ずしもミネラルウォーターの方が安全性が高いとはいえない。したがって、「自然系食品への安心感情」は、必ずしも科学的に検証された安全性・危険性に基づくものではないと考えられる。

食に対する安心・不安感情とデモグラフィック要因との関連について検討するため、「科学技術による食品への不安感情」尺度及び「自然系食品への安心感情」尺度を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を目的変数とする数量化 Ⅱ 類による分析を、それぞれ行なった（不安感情： $R^2=.08$ 、安心感情： $R^2=.03$ ）。

表8 科学技術による食品への不安感情に対する数量化 Ⅱ 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	357	3.14	-.11	.18	.16	.17 **
	女性	547	3.32	.07			
年代	20代以下	136	3.08	-.20	.35	.19	.22 **
	30代	132	3.14	-.14			
	40代	197	3.24	-.03			
	50代	230	3.35	.10			
	60代	209	3.35	.15			
学歴	小中卒	87	3.22	-.13	.19	.02	.10 **
	高卒	384	3.26	-.03			
	専・短大卒	233	3.29	.06			
	大・院卒	200	3.22	.04			
所属階層意識	上	54	3.28	.02	.13	.09	.08 *
	中の上	226	3.27	.02			
	中の中	345	3.27	.01			
	中の下	166	3.26	.01			
	下	113	3.13	-.10			
全体		904					
重相関係数		.28	定数項	3.25			
重相関係数の2乗		.08					

**p<.01、*p<.05

表9 自然系食品への安心感情に対する数量化 Ⅱ 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	357	2.54	-.02	.02	.04	.02
	女性	550	2.59	.01			
年代	20代以下	134	2.74	.17	.26	.14	.14 **
	30代	133	2.62	.04			
	40代	197	2.54	-.04			
	50代	233	2.49	-.09			
	60代	210	2.56	.00			
学歴	小中卒	87	2.52	-.02	.12	.07	.07 *
	高卒	390	2.57	.01			
	専・短大卒	232	2.64	.05			
	大・院卒	198	2.52	-.07			
所属階層意識	上	53	2.73	.14	.17	.07	.06
	中の上	225	2.55	-.02			
	中の中	346	2.58	.00			
	中の下	170	2.57	.00			
	下	113	2.54	-.03			
全体		907					
重相関係数		.17	定数項	2.57			
重相関係数の2乗		.03					

**p<.01、*p<.05

「科学技術による食品への不安感情」尺度については、年代（.22）、性別（.17）、学歴（.10）及び所属階層意識（.08）の偏相関係数が有意であった。

また「自然系食品への安心感情」尺度については、年代（.14）及び学歴（.07）の偏相関係数が有意であった。

数量化 Ⅱ 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、t 検定及び多重比較による検定を行なった結果、「科学技術による食品への不安感情」

は、50 代以上の層が 40 代以下の層よりも、また女性が男性よりも、高いことが明らかとなった。

また「自然系食品への安心感情」は、20 代以下の層が 40 代・50 代の層よりも高いことが明らかとなった。

また多重比較による検定の結果は有意でなかったが、数量化 Ⅱ 類による分析の結果、「科学技術による食品への不安感情」は所属階層意識が下の層で低い傾向があること、また「自然系食品への安心感情」は、所属階層意識が上の層で高い傾向があることが明らかとなった。

以上をまとめると、「科学技術による食品への不安感情」は女性、高年齢層で高く、所属階層意識が下の層で低い傾向があった。

また「自然系食品への安心感情」は、低年齢層、所属階層意識が上の層で高い傾向があった。

食に関する安全・危険判断と食に対する安心・不安感情の関係

で検討した食に関する安全・危険判断と、で検討した食に対する安心・不安感情の関係について検討するため、安全判断の数量化 Ⅱ 類による成分 1（値が大きいほど安全判断が多いことを示す）及び成分 2 並びに危険判断の数量化 Ⅱ 類による成分 1（値が大きいほど危険判断が多いことを示す）及び成分 2 と、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」との相関係数を算出した。

表10 食に関する安全・危険判断と食に対する安心・不安感情の関係

	安全判断の 多さ	安全判断 成分 2	危険判断の 多さ	危険判断 成分 2	科学技術食 品への不安	自然系食品 への安心
安全判断の多さ(成分 1)		(939)	(939)	(939)	(920)	(922)
安全判断成分 2	.00		(939)	(939)	(920)	(922)
危険判断の多さ(成分 1)	-.24 **	-.18 **		(944)	(925)	(927)
危険判断成分 2	.08 *	.40 **	.00		(925)	(927)
科学技術による食品への不安感情	-.23 **	-.27 **	.39 **	-.20 **		(916)
自然系食品への安心感情	.06	-.42 **	.05	-.28 **	.20 **	

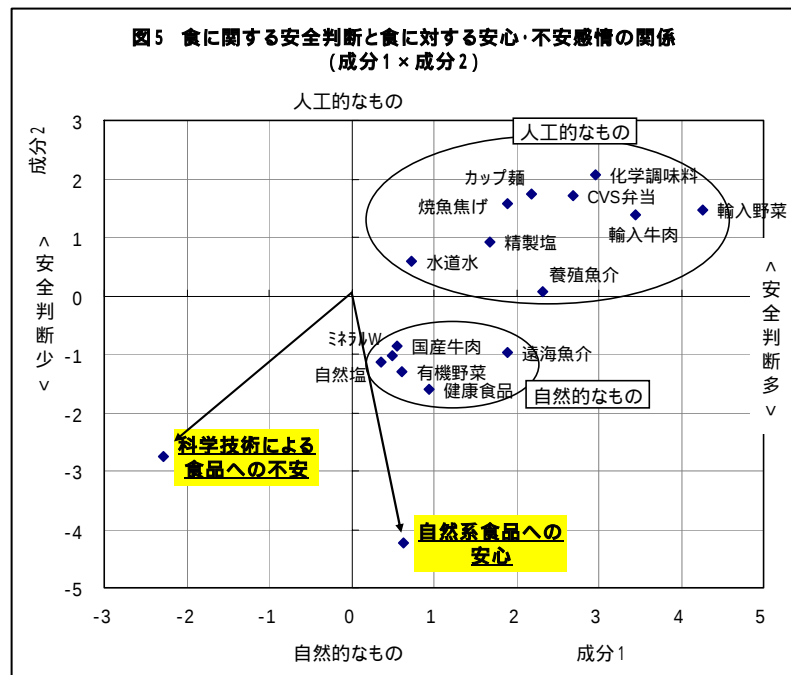
**p<.01, *p<.05 ()はNを示す。

まず、安全判断の多さと危険判断の多さの間には有意な負の相関が認められ、「安全だ」と思うものが多い層は、「危険かもしれない」と思うものが少ないことが確認された。

また、安全判断の成分 2 と危険判断の成分 2 間には有意な正の相関が認められ、「自然的なもの」を安全だと思う層ほど、「人工的なもの」を危険かもしれないと思うことが明らかとなった。

また「科学技術による食品への不安感情」と「自然系食品への安心感情」の間には有意な正の相関が認められ、一方の感情が高い層ほど他方も高いことが明らかとなった。

安全判断の成分 1 × 成分 2 のカテゴリースコアのプロット図に、成分 1 または成分 2 との相関係数が有意であった「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の相関係数をプロットした。

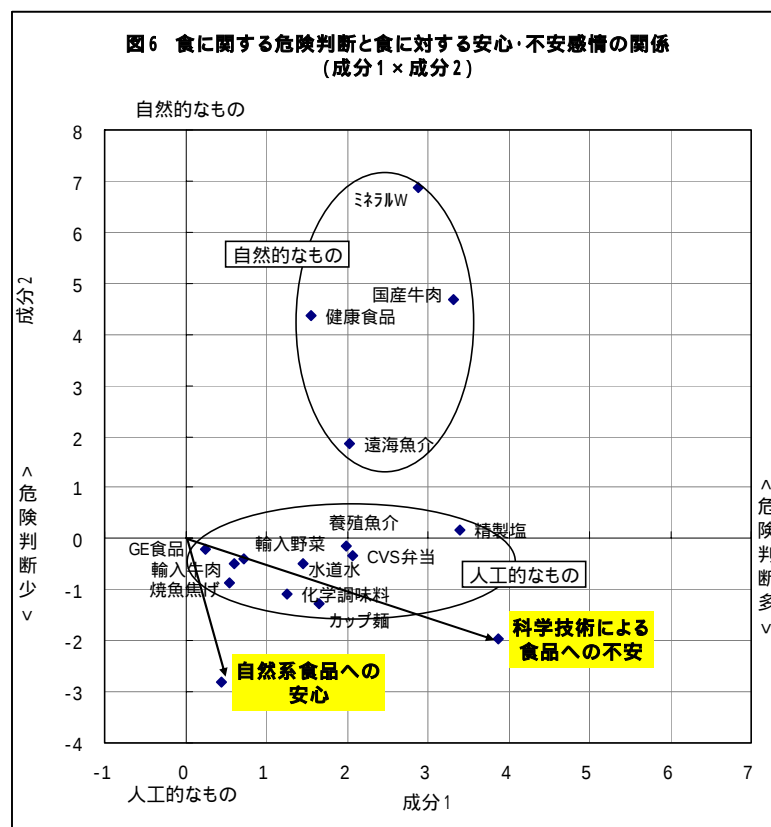


相関係数は10倍して表記。図6で同じ。

相関係数及びプロット図から、安全判断が多い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が低いことが明らかとなった。

また「自然的なもの」を安全だと思う層ほど、「自然系食品への安心感情」、「科学技術による食品への不安感情」の両方とも、高いことが明らかとなった。

同様に、危険判断の成分1×成分2のカテゴリースコアのプロット図に、成分1または成分2との相関係数が有意であった「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の相関係数をプロットした。



相関係数及びプロット図から、危険判断が多い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が高いことが明らかとなった。

また「人工的なもの」を危険かもしれないと思う層ほど、「科学技術による食品への不安感情」「自然系食品への安心感情」の両方とも、高いことが明らかとなった。

以上をまとめると、安全判断が多い層ほど危険判断が少なかった。また「自然系食品への安心感情」が高い層ほど「科学技術による食品への不安感情」が高かった。

また、「自然的なもの」を安全と判断する層ほど「自然系食品への安心感情」が高く、「人工的なもの」を危険と判断する層ほど「科学技術による食品への不安感情」が高いことが確認された。

まとめ

では、食の安全性に関する意識の様相の1つとして考えられた、食に関する安全・危険判断の実態を明らかにした。「自然塩」や「ミネラルウォーター」が安全と判断され、危険と判断されていなかった。また「遺伝子組換え食品」や「輸入冷凍野菜」が危険と判断され、安全と判断されていなかった。また安全・危険判断には、その食品が「自然的なもの」と捉えられているかどうかの関係している可能性が示唆された。

では、食の安全性に関する意識のもう1つの様相として考えられた、食に対する安心・不安感情の実態を明らかにした。現代日本における食に対する安心・不安感情として「自然系食品への安心感情」及び「科学技術による食品への不安感情」が抽出された。現代日本では、「科学技術による食品への不安感情」が高かった。

では、食に関する安全・危険判断と、食に対する安心・不安感情の関係について検討した。「自然的なもの」を安全と判断することが多い層ほど「自然系食品への安心感

情」が高く、また「人工的なもの」を危険と判断することが多い層ほど「科学技術による食品への不安感情」が高いことが確認された。

2. 食に関する知識・情報

2 では、食の安全意識に影響を与えるものと考えられた食に関する知識の実態や、食に関する知識に影響を与えるものと考えられた食に関する情報の使用及び信頼の実態、またこれらとデモグラフィック要因との関連や、これらと食の安全意識との関係について検討する。

食に関する知識

回答者の食に関する知識の実態を把握するため、「食に関する以下のそれぞれの文章は正しいと思いますか。間違っていると思いますか。あてはまる番号に○をひとつだけつけてください(「正しい」、「間違っている」、「わからない」の3択)」という質問を行った。

表11 食に関する知識の回答率(%)

設 問	(N=933 ~ 940)		
	正しい	間違っている	わからない
a.「有機栽培」の野菜や果物には、農薬は一切使ってはいけない	21.7	56.5	21.7
b.水道水はミネラルウォーターよりも、安全性に関する基準が厳しい	36.6	25.1	38.2
c.現在の母乳中のダイオキシンの濃度は、30年くらい前に比較すると下がってきている	9.2	42.6	48.2
d.遺伝子組換えでない野菜や果物には、遺伝子は含まれていない	6.2	52.8	40.9
e.白い砂糖は、漂白しているために白い	45.8	29.0	25.2
f.いわゆる自然塩を普通に使っていれば、体に必要なミネラルを十分に摂ることができる	18.3	49.8	31.9
g.鶏肉や卵を食べることで、鳥インフルエンザに感染する可能性は極めて低い	38.5	35.0	26.5
h.病原大腸菌O157は、消毒や加熱で殺菌することができる	74.8	9.5	15.7

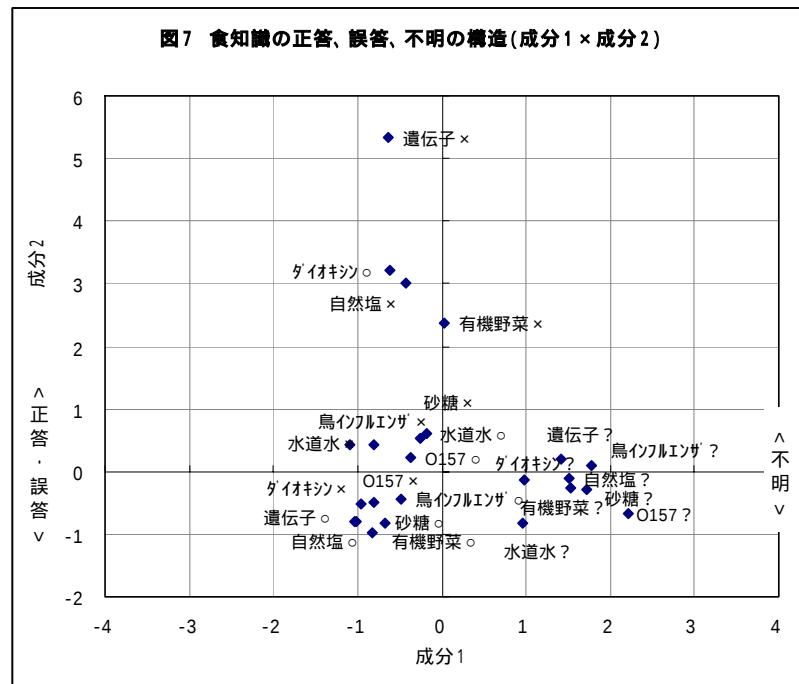
網掛けは正答（真の正解）を表す。

回答率は、「無回答」を除いて算出。

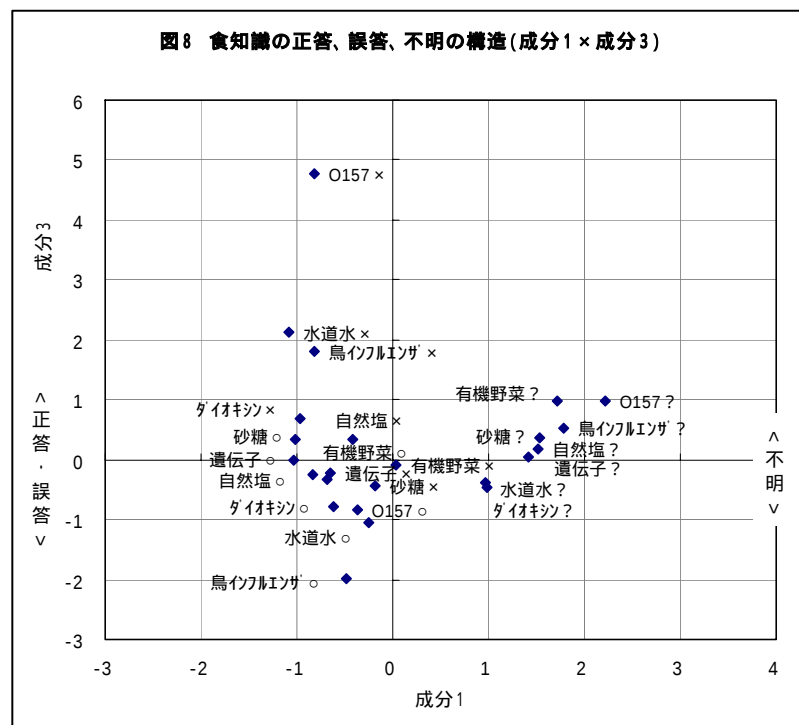
「O-157」についての設問が最も正答率が高く（74.8%）、誤答率が最も低かった（9.5%）。一方「母乳中のダイオキシン」に関する設問が最も正答率が低く（9.2%）、「わからない」の回答率（不明率）が最も高かった（48.2%）。また「白い砂糖」についての設問が最も誤答率が高かった（45.8%）。

回答者全体の、正答数、誤答数及び「わからない」と回答した数（不明数）を平均したところ、全回答者の平均正答数は 3.45、誤答数は 2.03、不明数は 2.47 であった。

食に関する知識の構造を検討するため、食知識に関する各設問の正答に 1 点、誤答に 2 点、不明に 3 点を与えて得点化し、数量化 Ⅱ 類による分析を行なった（固有値は、成分 1 =.29、成分 2 =.19、成分 3 =.16）。



「○」は正答、「×」は誤答、「？」は不明を表す。図8で同じ。



成分1は、「正答・誤答(-) - 不明(+)」を弁別していると解釈された。また、成分2及び成分3については、明確な解釈をすることができなかった。

以上をまとめると、正答率は「O157」についての設問で最も高く、「母乳中のダイオキシン」についての設問で最も低かった。誤答率は「白い砂糖」についての設問で最も

高く、「O157」についての設問で最も低かった。不明率は「母乳中のダイオキシン」に関する設問で最も高かった。

ただし、数量化 類によるいずれの成分でも正答と誤答とがはっきりと弁別されなかったことから、回答者は、正答と誤答についてあまりはっきりとした区別がついていない、すなわち、食に関して、あまり明確な知識を持っているとはいえないと考えられる。

数量化 類による成分2及び成分3について解釈ができなかったことから、以下では、数量化 類による各成分ではなく、食知識の正答数、誤答数、不明数をもって、食に関する知識の指標とする。

食に関する知識とデモグラフィック要因との関連について検討するため、正答数、誤答数及び不明数を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を説明変数とした数量化 類による分析を、それぞれ実施した(正答: $R^2=.10$ 、誤答: $R^2=.02$ 、不明: $R^2=.09$)。

表12 食知識の正答数に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	3.46	-.04	.07	-.01	.02
	女性	556	3.44	.03			
年代	20代以下	136	3.80	.15	.59	.21	.14 **
	30代	134	3.77	.21			
	40代	198	3.72	.21			
	50代	237	3.37	-.04			
	60代	216	2.87	-.38			
学歴	小中卒	91	2.62	-.56	1.12	.27	.22 **
	高卒	393	3.16	-.27			
	専・短大卒	236	3.74	.19			
	大・院卒	201	4.05	.56			
所属階層意識	上	56	3.02	-.56	.73	.11	.11 **
	中の上	228	3.75	.17			
	中の中	351	3.43	.00			
	中の下	171	3.40	.02			
	下	115	3.20	-.10			
全体		921					
重相関係数		.32	定数項	3.45			
重相関係数の2乗		.10					

**p<.01

表13 食知識の誤答数に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	2.09	.08	.14	.03	.05
	女性	556	2.00	-.05			
年代	20代以下	136	1.96	-.06	.22	.08	.07 *
	30代	134	2.12	.08			
	40代	198	2.11	.05			
	50代	237	2.11	.07			
	60代	216	1.88	-.14			
学歴	小中卒	91	1.71	-.23	.35	.09	.08 *
	高卒	393	2.14	.12			
	専・短大卒	236	2.02	-.03			
	大・院卒	201	2.00	-.09			
所属階層意識	上	56	2.00	.01	.30	.07	.07 *
	中の上	228	2.13	.09			
	中の中	351	2.01	-.03			
	中の下	171	2.13	.09			
	下	115	1.82	-.21			
全体		921					
重相関係数		.14	定数項	2.04			
重相関係数の2乗		.02					

*p<.05

表14 食知識の不明数に対する数量化 Ⅱ 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	2.38	-.05	.09	.04	.02
	女性	556	2.52	.03			
年代	20代以下	136	2.22	-.06	.71	.20	.13 **
	30代	134	2.07	-.28			
	40代	198	2.16	-.23			
	50代	237	2.50	.00			
	60代	216	3.10	.42			
学歴	小中卒	91	3.53	.75	1.21	.24	.17 **
	高卒	393	2.65	.16			
	専・短大卒	236	2.22	-.15			
	大・院卒	201	1.91	-.46			
所属階層意識	上	56	2.86	.47	.73	.14	.12 **
	中の上	228	2.08	-.26			
	中の中	351	2.53	.05			
	中の下	171	2.41	-.11			
	下	115	2.92	.32			
全体		921					
重相関係数		.29	定数項	2.46			
重相関係数の2乗		.09					

**p<.01

正答数については、学歴（.22）、年代（.14）及び所属階層意識（.11）の偏相関係数が有意であった。

誤答数については、学歴（.08）、所属階層意識（.07）及び年代（.07）の偏相関係数が有意であった。

不明数については、学歴（.17）、年代（.13）及び所属階層意識（.12）の偏相関係数が有意であった。

数量化 Ⅱ 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、多重比較による検定を行なった結果、正答数は、学歴が高い層ほど、50代以下の層が60代の層よりも、また所属階層意識が中の上の層が上及び下の層よりも、多いことが明らかとなった。

誤答数は、高校卒の層が、小中学校卒の層よりも多いことが明らかとなった。

不明数は、学歴が低い層ほど、60代の層が50代以下の層よりも、また所属階層意識が上・中の中・下の層が中の上の層よりも、多いことが明らかとなった。

以上をまとめると、学歴の高い層ほど、食に関して正しい知識を多く有していた。また60代の層は正しい知識が少なく、あいまいな知識（不明）が多かった。また所属階層意識が中の上の層は、正しい知識を多く有していた。

食に関する情報源

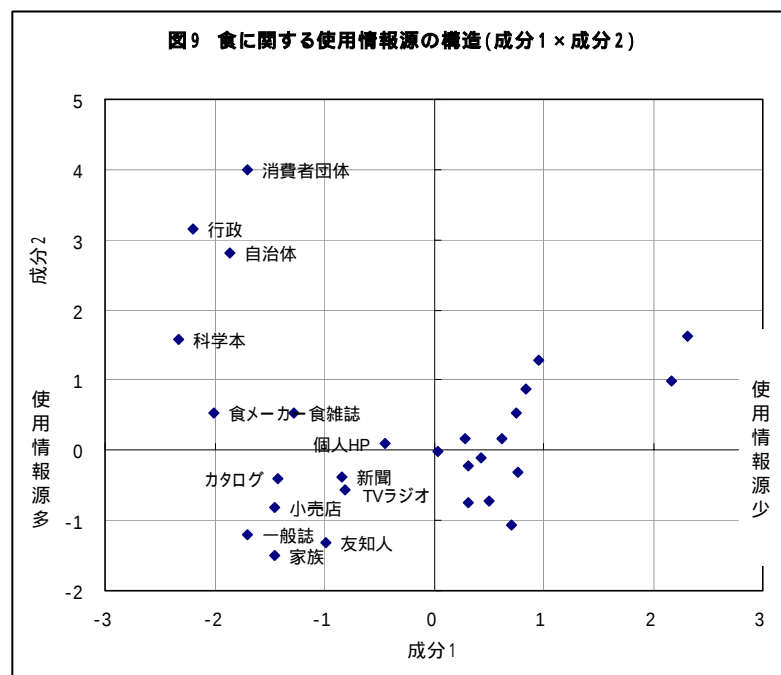
回答者が、食に関してどのような情報源を使用して情報を得ているのかを把握するため、複数の情報源について、「以下に食に関する団体や情報源をあげております。あなたは食に関して何か知りたいたと思われた時に、以下のどれから情報を得ておられますか。普段情報を得ているものすべてに○をつけてください（M.A.）」という質問を行なった。

表15 食に関して使用する情報源

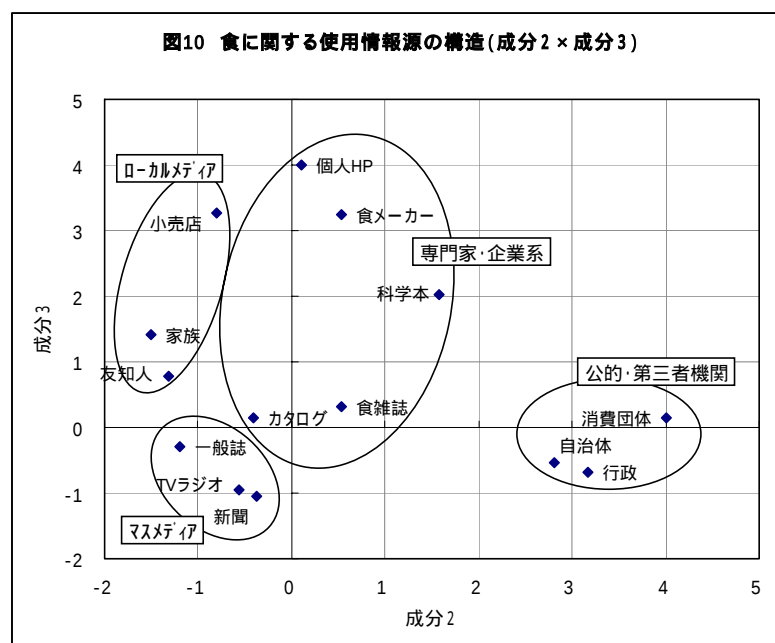
項目	選択率(%) N=944
4. テレビ・ラジオ	74.3
5. 新聞	72.2
14. 友人・知人	49.4
7. 食品や健康に関する雑誌	37.4
13. 家族	36.5
6. 一般雑誌、週刊誌	30.6
8. 生協や通販のカタログやチラシ	30.5
2. 地方自治体(都道府県、市町村、保健所、消費者センターなど)	27.4
1. 国の行政機関(厚生労働省、農林水産省など)	18.8
11. 食品メーカー	17.7
12. 小売店	16.5
9. 消費者団体	15.9
3. 科学者、研究者の書いた本	12.1
10. 食に関する個人のホームページ	8.1
15. その他	2.5
16. このなかに情報を得ているものはない	1.3

回答者が食に関して使用している情報源は、「テレビ・ラジオ」(74.3%)が最も多く、「新聞」(72.2%)が続いていた。

使用している情報源の構造を検討するため、選択率が5%以上の項目について、各項目を選択した場合に2点、選択しなかった場合に1点を与えて得点化し、数量化Ⅱ類による分析を実施した(固有値は、成分1=.14、成分2=.13、成分3=.09)。



選択したことを示すカテゴリースコアのみラベルを付した。



選択したことを示すカテゴリースコアのみをプロット。

成分1×成分2のプロット図から、成分1は、値が小さいほど、使用する情報源が多いことを示すサイズファクターであると解釈された。また成分2×成分3のプロット図から、回答者が使用する情報源は、大きく、「専門家・企業系」、「公的・第三者機関」、「マスメディア」、「ローカルメディア」に分類されると解釈された。

次に、回答者の食に関する情報源への信頼の実態を把握するため、「以下の食に関する団体や情報源の中で、あなたが『ここからの情報は信じられる』と感じているところに○をおつけください(M.A.)」という質問を行なった。

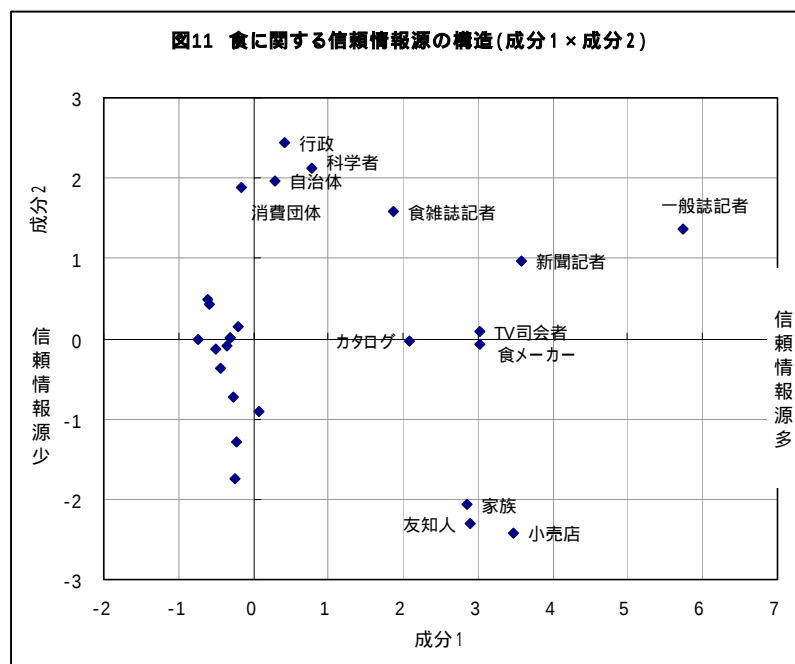
表16 食に関して信頼する情報源

項目	選択率(%) N=936
2. 地方自治体(都道府県、市町村、保健所、消費者センターなど)	47.0
1. 国の行政機関(厚生労働省、農林水産省など)	34.5
9. 消費者団体	32.6
3. 科学者、研究者	25.4
4. テレビ・ラジオの司会者やアナウンサー	19.8
7. 食品や健康に関する雑誌の記者	18.7
14. 友人・知人	17.4
13. 家族	17.1
8. 生協や通販のカタログやチラシ	13.2
5. 新聞記者	12.3
11. 食品メーカー	9.1
6. 一般雑誌、週刊誌の記者	5.8
12. 小売店	5.7
10. 食に関するホームページを開いている個人	4.1
15. その他	1.1
16. このなかに信用できるものはない	10.1

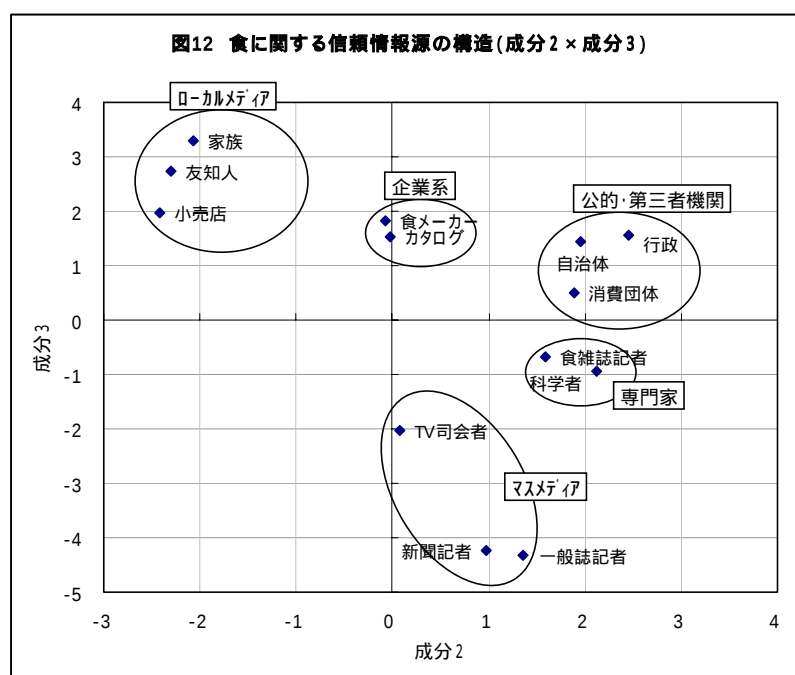
回答者は「地方自治体」(47.0%)を最も信頼しており、「国の行政機関」(34.5%)、「消費者団体」(32.6%)が続いていた。また「食品メーカー」への信頼は1割未満(9.1%)であった。また1割強(10.1%)の層は、表16のどの情報源も信頼できないと感じていた。

食に関して使用する情報源の選択率（表 15）と合わせて、回答者が食に関する情報源として最も使用しているのは「テレビ・ラジオ」や「新聞」だが、最も信頼しているのは「地方自治体」、「国の行政機関」や「消費者団体」であることが明らかとなった。

信頼する情報源の構造を検討するため、選択率 5%以上の項目（ただし「このなかに信頼できるものはない」を除く）について、各項目を選択した場合に 2 点、選択した場合に 1 点を与えて得点化し、数量化 Ⅱ 類による分析を実施した（固有値は、成分 1 = .14、成分 2 = .13、成分 3 = .09）。



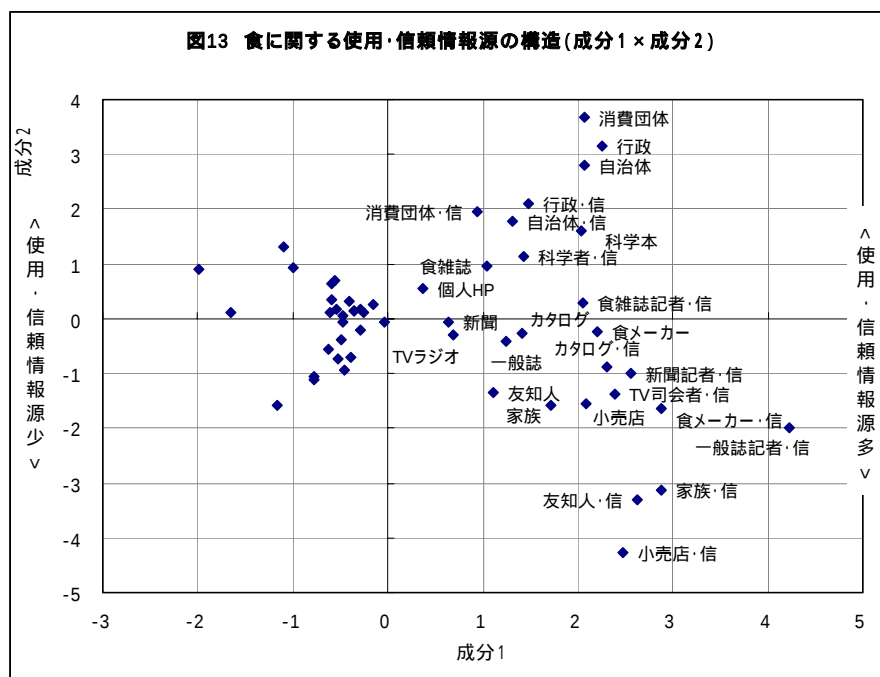
選択したことを示すカテゴリースコアのみラベルを付した。



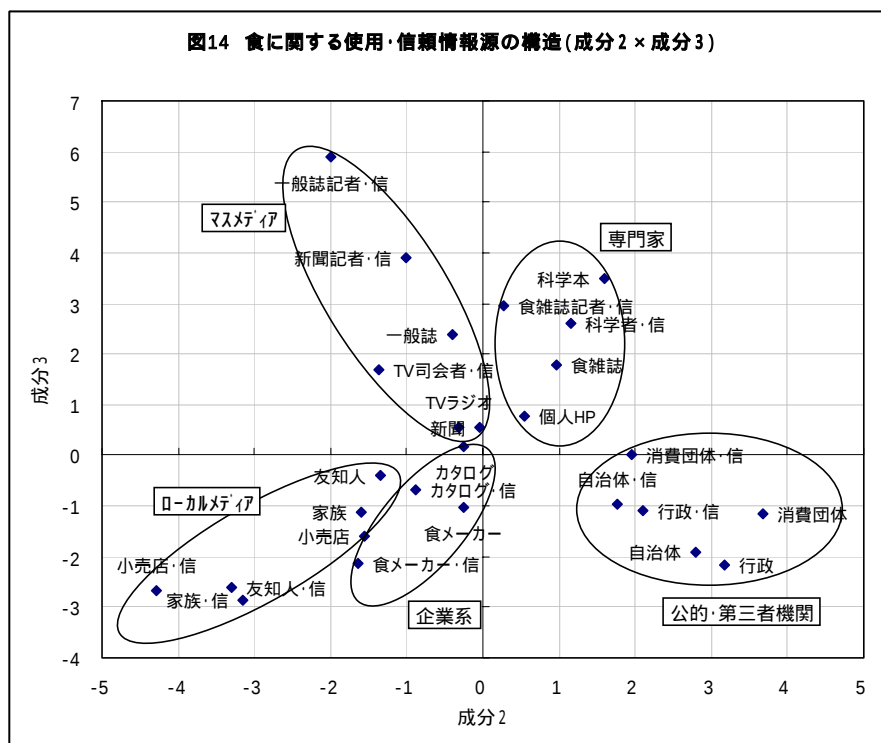
選択したことを示すカテゴリースコアのみをプロット。

成分1×成分2のプロット図から、成分1は、値が大きいほど、信頼する情報源が多いことを示すサイズファクターであると解釈された。また成分2×成分3のプロット図から、回答者が信頼する情報源は、大きく、「企業系」「公的・第三者機関」「専門家」「マスメディア」「ローカルメディア」に分類されると解釈された。

使用情報源、信頼情報源それぞれについての数量化 Ⅱ 類による分析の結果、それぞれの成分2×成分3のプロット図(図10、図12)における、情報源の分類のされ方が類似していた。この結果を踏まえ、次に、回答者が使用する情報源を実際に信頼しているのかどうかを検討するため、使用情報源、信頼情報源を合わせて、数量化 Ⅱ 類による分析を実施した(固有値は、成分1=.11、成分2=.09、成分3=.07)。



選択したことを示すカテゴリースコアのみラベルを付した。
「行政」は情報源の使用を、「行政・信」は情報源への信頼を示す。図14で同じ。



選択したことを示すカテゴリースコアのみをプロット。

成分1×成分2のプロット図から、成分1は、値が大きいほど使用・信頼している情報源が多いことを示すカテゴリースコアであると解釈された。

成分2×成分3のプロット図では、ある情報源の使用と、当該情報源への信頼は比較的近くに布置され、ある情報源を使用する層は、当該情報源を信頼する傾向があることが確認された。

また使用・信頼される情報源は、使用情報源（図 10）、信頼情報源（図 12）それぞれの分析における分類とほぼ同様に、大きく「専門家」、「公的・第三者機関」、「企業系」、「ローカルメディア」及び「マスメディア」の 5 つに分類されると解釈された。

以上をまとめると、回答者は「テレビ・ラジオ」及び「新聞」を情報源として使用することが最も多いが、最も信頼しているのは「地方自治体」、「国の行政機関」及び「消費者団体」であった。

ある情報源を使用する層は、当該情報源を信頼する傾向があった。また使用・信頼する情報源は、大きく「専門家」、「公的・第三者機関」、「企業系」、「ローカルメディア」及び「マスメディア」に分類された。

図 14 で使用する情報源と当該情報源への信頼が近くに布置されたことから、情報源とデモグラフィック要因との関連については、使用情報源と信頼情報源をあわせて検討することとした。使用・信頼情報源の数量化 類による成分 1、成分 2 及び成分 3 を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を説明変数とする数量化 類による分析を、それぞれ行なった（成分 1 : $R^2=.05$ 、成分 2 : $R^2=.04$ 、成分 3 : $R^2=.05$ ）。

表17 使用・信頼情報源の成分1に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	.01	.01		.02	.01
	女性	550	-.01	-.01			
年代	20代以下	136	-.17	-.21		.60	.20 .21 **
	30代	134	-.18	-.20			
	40代	194	-.12	-.13			
	50代	234	-.02	-.01			
	60代	217	.35	.39			
学歴	小中卒	90	.09	-.16		.26	-.02 .07 *
	高卒	393	.01	-.02			
	専・短大卒	232	.00	.11			
	大・院卒	200	-.06	.00			
所属階層意識	上	55	.09	.11		.18	.05 .05
	中の上	226	-.08	-.07			
	中の中	348	.03	.03			
	中の下	170	.02	.01			
	下	116	.01	-.01			
全体		915					
重相関係数		.22	定数項	.00			
重相関係数の2乗		.05					

**p<.01、*p<.05

表18 使用・信頼情報源の成分2に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	.07	.05		.08	.07 .04
	女性	550	-.06	-.03			
年代	20代以下	136	-.20	-.24		.50	.14 .17 **
	30代	134	-.15	-.18			
	40代	194	-.07	-.09			
	50代	234	.05	.07			
	60代	217	.19	.26			
学歴	小中卒	90	-.18	-.37		.51	.07 .13 **
	高卒	393	.03	.00			
	専・短大卒	232	-.08	.02			
	大・院卒	200	.09	.14			
所属階層意識	上	55	-.28	-.24		.38	.09 .09 **
	中の上	226	.05	.04			
	中の中	348	-.06	-.06			
	中の下	170	.03	.04			
	下	116	.11	.14			
全体		915					
重相関係数		.21	定数項	-.01			
重相関係数の2乗		.04					

**p<.01

表19 使用・信頼情報源の成分3に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	365	-0.11	-0.11		0.19	0.10 0.09 **
	女性	550	0.09	0.08			
年代	20代以下	136	-0.09	-0.14		0.31	0.15 0.13 **
	30代	134	0.20	0.15			
	40代	194	0.16	0.13			
	50代	234	0.04	0.04			
	60代	217	-0.22	-0.16			
学歴	小中卒	90	-0.32	-0.27		0.37	0.12 0.10 **
	高卒	393	0.00	-0.02			
	専・短大卒	232	0.16	0.10			
	大・院卒	200	-0.01	0.05			
所属階層意識	上	55	-0.04	-0.08		0.23	0.07 0.09 **
	中の上	226	-0.03	-0.06			
	中の中	348	-0.05	-0.05			
	中の下	170	0.11	0.11			
	下	116	0.10	0.16			
全体		915					
重相関係数		0.22	定数項	0.01			
重相関係数の2乗		0.05					

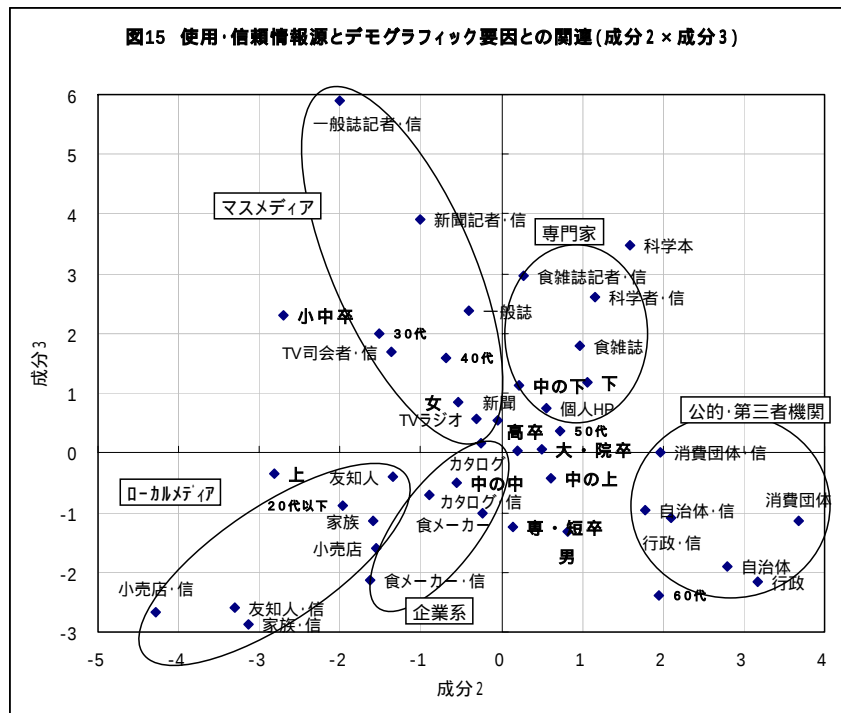
**p<.01

成分1については、年代(.21)及び学歴(.07)の偏相関係数が有意であった。

成分2については、年代(.17) 学歴(.13) 及び所属階層意識(.09)の偏相関係数が有意であった。

成分3については、年代(.13) 学歴(.10) 性別(.09) 及び所属階層意識(.09)の偏相関係数が有意であった。

成分2または成分3と偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、その水準ごとにサンプルスコアの平均値を算出し、カテゴリースコアと同時にプロットした。



選択があったことを示すカテゴリースコアのみをプロット。
平均値は10倍して表記。

数量化 Ⅱ 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、多重比較による検定を行なった結果、60 代の層は、50 代以下の層よりも、成分 1 のサンプルスコアが高かった。この結果から、60 代の層は、50 代以下の層よりも、使用・信頼する情報源が多いことが明らかとなった。

また多重比較による検定結果は有意ではなかったが、数量化 Ⅱ 類による分析の結果、大学・大学院卒の層は、専門学校・短大卒以下の学歴の層よりも、成分 1 のサンプルスコアが低い傾向があった。この結果から、大学・大学院卒の層は、専門学校・短大卒以下の学歴の層よりも、使用・信頼する情報源が少ない傾向があることが明らかとなった。

また多重比較による検定の結果は有意ではなかったが、成分 2 × 成分 3 のプロット図では、20 代以下の層は「ローカルメディア」、30 代・40 代の層は「マスメディア」、50 代の層は「専門化」、60 代の層は「公的・第三者機関」の近くに、それぞれ布置された。また所属階層意識が下及び中の中の層は「専門化」、中の上及び中の中の層は「企業系」、上の層は「ローカルメディア」の近くに、それぞれ布置された。

以上の結果から、年代が上がるにつれて、使用・信頼する情報源が「ローカルメディア」から「マスメディア」へ、次に「マスメディア」から「専門家」へ、次に「専門化」から「公的・第三者機関」へと推移する傾向があることが明らかとなった。また所属階層意識が高くなるにつれて、使用・信頼する情報源が「専門家」から「企業系」へ、次に「企業系」から「ローカルメディア」へと推移する傾向があることが明らかとなった。

以上をまとめると、高年齢の層は使用・信頼する情報源が多く、また高学歴の層は使用・信頼する情報源が少ない傾向があった。

使用・信頼する情報源は、年代や、所属階層意識によって異なる傾向があった。

使用・信頼情報源と食に関する知識

で検討した食に関して使用・信頼する情報源と で検討した食に関する知識との関係について検討するため、まず、使用・信頼している情報源についての数量化 Ⅱ 類の成分 1（値が大きいほど使用・信頼する情報源が多いことを示す）と、食知識の正答数、誤答数及び不明数との相関係数を算出した。

表20 食に関する情報源と食に関する知識との関係				
	使用信頼情報源の多さ	正答数	誤答数	不明数
使用・信頼情報源の多さ (使用・信頼情報源成分 1)		(934)	(934)	(934)
食知識正答数	-.05		(942)	(942)
食知識誤答数	.07 *	-.19 **		(942)
食知識不明数	-.02	-.71 **	-.53 **	

**p<.01、*p<.05 ()はNを示す。

使用・信頼する情報源の多さと、正答数及び不明数との間には、有意な相関が認められなかった。

使用・信頼する情報源の多さと誤答数の間には有意な正の相関が認められ、使用・信頼する情報源が多い層ほど誤答数が多いことが明らかとなった。

次に、個別の情報源と、食に関する知識との関係について検討するため、各種情報源の使用または信頼の有無別に、食知識の正答数、誤答数及び不明数について、t 検定を行なった。その結果、平均値に有意な差が認められたものを示すと、表 21 から表 23 のとおりであった。

表21 情報源の使用、信頼の有無別の食知識の正答数

情報源	使用する		>	使用しない		t値(df)
	N	平均(SD)		N	平均(SD)	
科学者・研究者の書いた本	113	3.87 (1.72)	>	829	3.39 (1.64)	t(940)=2.86**
食に関する個人のホームページ	76	3.84 (1.51)	>	866	3.42 (1.66)	t(940)=2.15*
	信頼する		<	信頼しない		t値(df)
	N	平均(SD)		N	平均(SD)	
テレビ・ラジオの司会者・アナウンサー	184	3.00 (1.64)	<	750	3.57 (1.64)	t(932)=-4.19**
家族	160	3.16 (1.68)	<	774	3.51 (1.64)	t(932)=-2.46**
友人・知人	162	3.04 (1.68)	<	772	3.54 (1.64)	t(932)=-3.55**

**p<.01、*p<.05

表22 情報源の使用、信頼の有無別の食知識の誤答数

情報源	使用する		>	使用しない		t値(df)
	N	平均(SD)		N	平均(SD)	
食品や健康に関する雑誌	353	2.18 (1.41)	>	589	1.94 (1.33)	t(940)=2.67**
	信頼する		>	信頼しない		t値(df)
	N	平均(SD)		N	平均(SD)	
地方自治体	438	2.17 (1.38)	>	496	1.91 (1.34)	t(932)=2.92**
科学者、研究者	237	2.22 (1.41)	>	697	1.97 (1.34)	t(932)=2.44**
消費者団体	304	2.22 (1.36)	>	630	1.94 (1.35)	t(932)=2.93**

**p<.01

表23 情報源の使用、信頼の有無別の食知識の不明数

情報源	使用する		<	使用しない		t値(df)
	N	平均(SD)		N	平均(SD)	
国の行政機関	176	2.18 (1.91)	<	766	2.54 (1.92)	t(940)=-2.24*
科学者、研究者の書いた本	113	2.02 (1.79)	<	829	2.53 (1.93)	t(940)=-2.67**
食に関する個人のホームページ	76	1.96 (1.52)	<	866	2.51 (1.94)	t(940)=-2.41*
	信頼する		<	信頼しない		t値(df)
	N	平均(SD)		N	平均(SD)	
科学者、研究者	237	2.16 (1.77)	<	697	2.56 (1.95)	t(932)=-2.76**
テレビ・ラジオの司会者・アナウンサー	184	2.89 (2.01)	>	750	2.35 (1.88)	t(932)=3.43**
消費者団体	304	2.28 (1.85)	<	630	2.55 (1.94)	t(932)=-2.01*
友人・知人	162	2.87 (2.15)	>	772	2.37 (1.85)	t(214)=2.73**

**p<.01、*p<.05

「科学者、研究者が書いた本」及び「食に関する個人のホームページ」を使用する層、また「テレビ・ラジオの司会者やアナウンサー」、「家族」及び「友人・知人」を（食に関する情報源として）信頼しない層は、食知識の正答数が多かった。

「食品や健康に関する雑誌」を使用する層、また「地方自治体」、「科学者、研究者」、「消費者団体」を信頼する層は、誤答数が多かった。

「行政機関」、「科学者、研究者が書いた本」、「食に関する個人のホームページ」を使用しない層、また「科学者、研究者」、「消費者団体」を信頼しない層、「テレビ・ラジオの司会者やアナウンサー」、「友人・知人」を信頼する層は、不明数が多かった。

以上をまとめると、使用・信頼する情報源の多さは、正答数とは関係がなかった。また使用・信頼する情報源の多い層は、誤答数が多かった。

個別の情報源との関係では、「科学者が書いた本」は食に関する正しい知識を、また「食品や健康に関する雑誌」は誤った知識をもたらす傾向があると解釈された。また各種情報源を信頼する層の方が、食に関する誤った知識やあいまいな知識（不明）が多い傾向があった。

使用・信頼する情報源の多さと正答数には関係がなかったこと、多くの情報源を使用・信頼している層の方が、誤った知識が多かったこと、また、使用する情報源の種類によっては、むしろ誤った知識が多くなる傾向があったことから、情報源を無批判に使用・信頼する態度は、必ずしも正しい知識の獲得にはつながらないといえる。したがって、情報源を無批判に使用・信頼するのではなく、批判的に見て、使用・信頼するかどうかを選択する態度が、正しい知識の獲得につながると考えられる。

食に関する知識と食に関する安全・危険判断

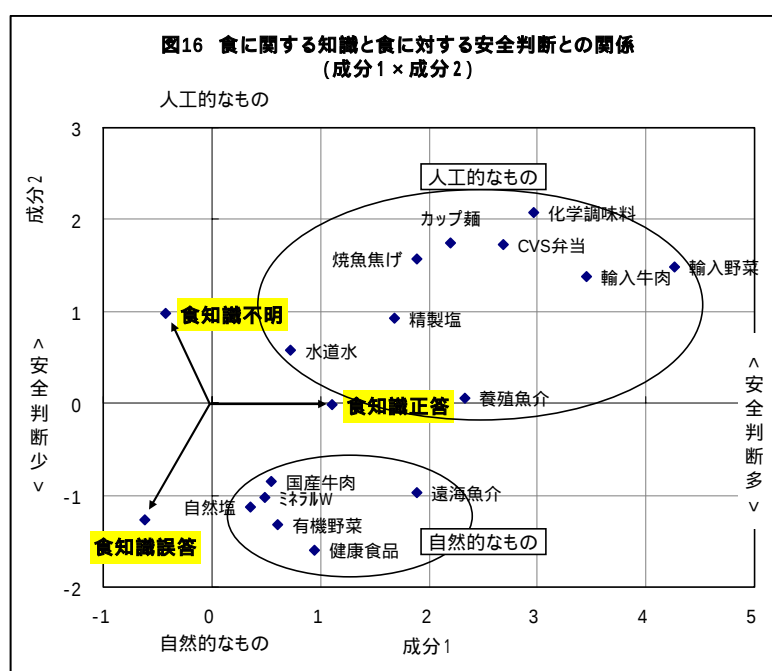
で検討した食に関する知識と、1 - で検討した食に関する安全・危険判断との関係を検討するため、食知識の正答数、誤答数及び不明数と、安全判断についての数量化 類による成分1（値が大きいほど安全判断が多いことを示す）及び成分2並びに危険判断についての数量化 類による成分1（値が大きいほど危険判断が多いことを示す）及び成分2との相関係数を算出した。

表24 食に関する知識と食に対する安全・危険判断との関係

	正答数	誤答数	不明数	安全判断の 多さ	安全判断 成分2	危険判断の 多さ	危険判断 成分2
食知識正答数		(942)	(942)	(937)	(937)	(942)	(942)
食知識誤答数	-.19 **		(942)	(937)	(937)	(942)	(942)
食知識不明数	-.71 **	-.53 **		(937)	(937)	(942)	(942)
安全判断の多さ(成分1)	.11 **	-.06	-.04		(939)	(939)	(939)
安全判断成分2	.00	-.13 **	.10 **	.00		(939)	(939)
危険判断の多さ(成分1)	.06	.14 **	-.15 **	-.24 **	-.18 **		(944)
危険判断成分2	.01	-.11 **	.06	.08	.40 **	.00	

**p<.01、*p<.05 ()はNを示す。

次に、安全判断の成分1または成分2と有意な相関が認められた食知識の正答数、誤答数及び不明数について、相関係数を成分1×成分2のプロット図にプロットした。

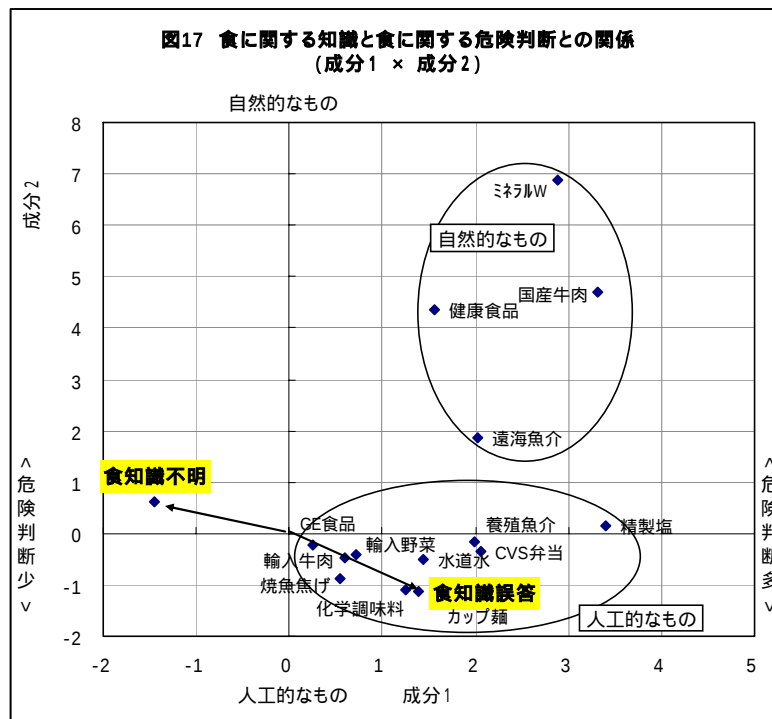


選択したことを示すカテゴリースコアのみをプロット。図17で同じ。

相関係数は10倍して表記。図17で同じ。

相関係数及びプロット図から、食知識の正答数が多い層ほど、安全判断が多いことが明らかとなった。また誤答数が多い層ほど、「自然的なもの」を安全と思っていることが明らかとなった。また不明数が多い層ほど、「人工的なもの」を安全と思っていることが明らかとなった。

また、危険判断の成分1または成分2と有意な相関が認められた食知識の誤答数及び不明数について、相関係数を成分1×成分2のプロット図にプロットした。



相関係数及びプロット図から、食知識の誤答数が多い層ほど、危険判断が多く、また「人工的なもの」を危険と思っていることが明らかとなった。また不明数が多い層ほど、危険判断が少ないことが明らかとなった。

以上をまとめると、食に関して正しい知識を有している層ほど、安全判断が多かった。ただし、正しい知識と、危険判断との間には関係が認められなかった。

食に関して誤った知識を有している層ほど、「自然的なもの」を安全と、「人工的なもの」を危険と思っていた。

また食に関してあいまいな知識（不明）を有している層ほど、「人工的なもの」を安全とっており、また危険判断が少なかった。

食に関する知識と食に対する安心・不安感情

で検討した食に関する知識と、1 - で検討した食に対する安心・不安感情との関係について検討するため、食知識の正答数、誤答数及び不明数と、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」との相関係数を算出した。

表25 食に関する知識と食に対する安心・不安感情との関係

	正答数	誤答数	不明数	科学技術による食品 への不安感情	自然系食品への 安心感情
食知識正答数		(942)	(942)	(925)	(927)
食知識誤答数	-.19 **		(942)	(925)	(927)
食知識不明数	-.71 **	-.53 **		(925)	(927)
科学技術による食品への不安感情	.03	.17 **	-.14 **		(916)
自然系食品への安心感情	-.17 **	.20 **	.01	.20 **	

p<.01** ()はNを示す。

食知識の正答数は、「科学技術による食品への不安感情」との間には、有意な相関が認められなかった。また「自然系食品への安心感情」との間に、有意な負の相関が認

められ、正答数が多い層ほど、「自然系食品への安心感情」が低いことが明らかとなった。

誤答数と「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の両者との間に、有意な正の相関が認められ、誤答数が多い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の両方が高いことが明らかとなった。

不明数と「科学技術による食品への不安感情」との間に、有意な負の相関が認められ、不明数が多い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が低いことが明らかとなった。

以上をまとめると、食に関する誤った知識が多い層ほど、「自然系食品への安心感情」が高かった。この結果は、1 - で示した「自然系食品への安心感情」が科学的に検証された安全性・危険性に基づかないとする考察の妥当性を支持する。また、食に関する正しい知識の多い層ほど、「自然系食品への安心感情」が低いという結果も、この考察を支持しているものと考えられる。

また、食に関する誤った知識が多い層は、「科学技術による食品への不安感情」もまた高かった。この結果から、「自然系食品への安心感情」が科学的に検証された安全性・危険性に基づかないことと同様に、「科学技術による食品への不安感情」もまた、科学的に検証された安全性・危険性とは関係のない、正しい知識に基づかない感情であると考えられる。

更に、食に関するあいまいな知識が多い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が低かった。で示したように、あいまいな知識が多い層ほど、危険判断が少なく、また「人工的なもの」を安全と思っていたことと合わせて、あいまいな知識が多い層は、食の安全性や危険性についてあまり深く考えずに、漠然とした安心感を抱いていると考えられる。

上述のように、食に関する誤った知識が、「自然系食品への安心感情」や「科学技術による食品への不安感情」を高めていた。そこで、どのような誤った知識がそれぞれの感情を高めるのかについて詳細に検討するため、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」を目的変数、食知識の各設問に対する回答（正答、誤答、不明）を説明変数とする数量化 Ⅱ 類による分析を、それぞれ実施した（不安： $R^2=.06$ 、安心： $R^2=.11$ ）。

表26 科学技術による食品への不安感情に対する、食知識を説明変数とした数量化 Ⅱ 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
a. 「有機栽培」の野菜や果物には、 農薬は一切使ってはいけない	正答	507	3.25	-.01	.16	.14	.10 **
	誤答	195	3.37	.09			
	不明	190	3.15	-.07			
b. 水道水はミネラルウォーターより も、安全性に関する基準が厳しい	正答	329	3.28	.01	.03	.01	.03
	誤答	227	3.26	-.02			
	不明	336	3.23	.01			
c. 現在の母乳中のダイオキシンの 濃度は、30年くらい前に比較す ると下がってきている	正答	77	3.36	.05	.10	.10	.08 *
	誤答	384	3.29	.04			
	不明	431	3.20	-.04			
d. 遺伝子組換えでない野菜や果物 には、遺伝子は含まれていない	正答	475	3.25	-.03	.28	.14	.12 **
	誤答	53	3.56	.25			
	不明	364	3.22	.00			
e. 白い砂糖は、漂白しているため に白い	正答	260	3.23	-.03	.10	.11	.09 **
	誤答	406	3.32	.05			
	不明	226	3.17	-.05			
f. いわゆる自然塩を普通に使って いれば、体に必要なミネラルを十 分に摂ることができる	正答	448	3.25	.00	.01	.04	.01
	誤答	160	3.32	.01			
	不明	284	3.22	.00			
g. 鶏肉や卵を食べることで、鳥イン フルエンザに感染する可能性は 極めて低い	正答	348	3.25	-.02	.03	.02	.02
	誤答	309	3.29	.01			
	不明	235	3.22	.01			
h. 病原大腸菌O157は、消毒や加 熱で殺菌することができる	正答	661	3.29	.03	.13	.12	.09 **
	誤答	86	3.23	-.02			
	不明	145	3.11	-.11			
全体		892					
重相関係数		.24	定数項	3.25			
重相関係数の2乗		.06					

**p<.01、*p<.05

表27 自然系食品への安心感情に対する、食知識を説明変数とした数量化 Ⅱ 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
a. 「有機栽培」の野菜や果物には、農薬は一切使っていない	正答 誤答 不明	506 197 193	2.47 2.81 2.59	-.09 .21 .01	.30	.23	.20 **
b. 水道水はミネラルウォーターよりも、安全性に関する基準が厳しい	正答 誤答 不明	328 227 341	2.50 2.73 2.53	-.09 .17 -.03	.25	.16	.17 **
c. 現在の母乳中のダイオキシンの濃度は、30年くらい前に比較すると下がってきている	正答 誤答 不明	77 384 435	2.69 2.58 2.54	.08 .03 -.04	.12	.07	.08 *
d. 遺伝子組換えでない野菜や果物には、遺伝子は含まれていない	正答 誤答 不明	473 54 369	2.51 2.81 2.61	-.04 .10 .03	.14	.13	.07 *
e. 白い砂糖は、漂白しているために白い	正答 誤答 不明	258 410 228	2.53 2.58 2.59	-.02 .01 .01	.03	.04	.02
f. いわゆる自然塩を普通に使っていれば、体に必要なミネラルを十分に摂ることができる	正答 誤答 不明	449 161 286	2.51 2.75 2.57	-.05 .12 .01	.17	.15	.11 **
g. 鶏肉や卵を食べることで、鳥インフルエンザに感染する可能性は極めて低い	正答 誤答 不明	349 309 238	2.53 2.58 2.63	-.02 -.03 .06	.09	.05	.06
h. 病原大腸菌O157は、消毒や加熱で殺菌することができる	正答 誤答 不明	663 87 146	2.57 2.60 2.56	.00 .01 -.03	.04	.01	.02
全体		896					
重相関係数		.33	定数項	2.57			
重相関係数の2乗		.11					

**p<.01、*p<.05

「科学技術による食品への不安感情」については、「遺伝子組換え食品」(.12)、「有機野菜」(.10)、「O157」(.09)、「白い砂糖」(.09)及び「ダイオキシンの」(.10)の偏相関係数が有意であった。偏相関係数が有意であった設問について、多重比較による検定を行なったところ、誤答した層がそれ以外(正答または不明)の層よりも高かったのは、「遺伝子組換え食品」、「有機野菜」及び「白い砂糖」であった。

また「自然系食品への安心感情」については、「有機野菜」(.20)、「水道水」(.17)、「自然塩」(.11)、「ダイオキシンの」(.08)及び「遺伝子組換え食品」(.07)の偏相関係数が有意であった。偏相関係数が有意であった設問について、多重比較による検定を行なったところ、誤答した層がそれ以外の層よりも高かったのは、「有機野菜」、「水道水」及び「遺伝子組換え食品」であった。

以上の結果から、「遺伝子組換え食品」や「有機野菜」について誤答した層は、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の両方とも高いことが明らかとなった。

まとめ

では、食に関する知識の実態を明らかにした。回答者は、食に関してあまり明確な知識を有しているとはいえないことが明らかとなった。

では、食に関する情報源の使用、信頼の実態について明らかにした。回答者は、「マスメディア」を最も使用するが、最も信頼しているのは「公的・第三者機関」であった。またある情報源を使用する層は、当該情報源を信頼する傾向があった。

では、食に関する情報源と、食に関する知識との関係について検討した。使用・信頼する情報源の多さは、正しい知識とは関係がなく、むしろ誤った知識をもたらすと考えられた。また、正しい知識を得るには、情報源の選択や、情報源を無批判に信頼しない態度が重要である可能性が示唆された。

では、食に関する知識と、食に関する安全・危険判断との関係について検討した。正しい知識が多い層ほど安全判断が多かったが、正しい知識と危険判断の多さとは関係がないことが明らかとなった。また誤った知識が多い層ほど、「自然的なもの」を安全と判断し、「人工的なもの」を危険と判断することが多いことが明らかとなった。

では、食に関する知識と、食に対する安心・不安感情との関係について検討した。食に関する正しい知識が多い層ほど「自然系食品への安心感情」が低かったが、正しい知識と「科学技術による食品への不安感情」とは関係がないことが明らかとなった。また誤った知識の多い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の両方が高いこと、またあいまいな知識が多い層ほど「科学技術による食品への不安感情」が低いことが明らかとなった。

3. 食に関する信頼

3 では、食に関する知識とは別に食の安全性に関する意識に影響を与えていると考えられた、食に関する事業者等への信頼の実態や、この信頼とデモグラフィック要因との関連、また食の安全性に関する意識との関係について検討する。

食に関する事業者等への信頼

回答者の、食品を製造・供給している事業者や、食品の安全性を管理している行政機関などに対する、安全性に関する信頼の実態を把握するため、「食品の安全に関する取り組みにおいて、つぎの団体や人々はどの程度信頼できると思いますか。あなたの気持ちや考えに最も近いところに○をひとつだけつけてください」という4件法（「信頼できる」「やや信頼できる」「あまり信頼できない」「信頼できない」）の質問を行なった。

それぞれの項目について、「信頼できる」に4点、「やや信頼できる」に3点、「あまり信頼できない」に2点、「信頼できない」に1点を与えて得点化した。

まず、各項目の得点の平均値を算出したところ、「生協」(2.90)、「国内の食品メーカー」(2.55)、「国内の農家・生産者」(2.88)の平均値は、それぞれ理論的中間点(2.50)を有意に上回っていた。

一方、「大手スーパー」(2.44)、「海外の食品メーカー」(1.88)、「海外の農家・生産者」(1.91)及び「食品輸入業者」(1.73)の得点平均値は、いずれも理論的中間点を有意に下回っていた(表28)。

次に、得点化した各項目について、因子分析を実施した。

表28 事業者等への信頼についての因子分析結果(主成分バリマックス法)

	国内事業者・ 行政への信頼	海外事業者 への信頼	尺度得点の 平均値
7 大手スーパー	.77	.19	2.44
8 生協(生活協同組合)	.77	.00	2.90
4 国内の食品メーカー	.70	.32	2.55
2 国内の農家・生産者	.58	.24	2.88
1 政府(行政)	.48	.16	2.55
5 海外の食品メーカー	.24	.85	1.88
3 海外の農家・生産者	.14	.84	1.91
6 食品輸入業者	.23	.79	1.73
負荷量の2乗和	2.38	2.28	
回転後の寄与率(%)	29.70	28.47	
α係数	.72	.81	
尺度平均値	2.66	1.84	

その結果、2因子が抽出された(累積寄与率 58.17%)。第1因子は「国内事業者・行政への信頼」、第2因子は「海外事業者への信頼」と命名された。それぞれの因子に含まれた項目の得点を単純加算し、項目数で除した値を尺度得点とした(得点が高いほど、当該の信頼が高いことを表す)。両尺度について、Cronbach のα係数を算出したところ、十分な信頼性が確認された(国内事業者・行政 $\alpha = .72$ 、海外事業者 $\alpha = .81$)。

「国内事業者・行政への信頼」尺度得点の平均値(2.66)は、理論的中間点を有意に上回っていた。また「海外事業者への信頼」尺度得点の平均値(1.84)は、理論的中間点を有意に下回っていた。以上の結果から、現代日本では、「国内事業者・行政への信頼」が高く、「海外事業者への信頼」が低いことが明らかとなった。

以上をまとめると、現代日本においては、食品の安全性への取り組みに関して、国内の事業者や行政への信頼が高く、海外の事業者への信頼が低かった。また国内の事業者の中でも、特に「生協」及び「国内の農家・生産者」への信頼が高かった。

事業者等への信頼とデモグラフィック要因との関連を検討するため、両尺度を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を説明変数とする、数量化 Ⅱ 類による分析をそれぞれ実施した(国内： $R^2 = .02$ 、海外： $R^2 = .03$)。

表29 「国内事業者・行政への信頼」に対する数量化 Ⅱ 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性						.01	.00
	男性	352	2.66	.01			.01
	女性	534	2.66	.00			
年代						.16	.11
	20代以下	136	2.74	.08			.12 **
	30代	132	2.71	.05			
	40代	192	2.63	-.04			
	50代	230	2.59	-.08			
	60代	196	2.69	.03			
学歴						.05	.01
	小中卒	82	2.66	.03			.03
	高卒	376	2.65	.00			
	専・短大卒	229	2.68	.01			
	大・院卒	199	2.66	-.03			
所属階層意識						.17	.10
	上	52	2.62	-.05			.10 **
	中の上	221	2.71	.05			
	中の中	336	2.67	.01			
	中の下	166	2.67	.01			
	下	111	2.55	-.12			
全体		886					
重相関係数		.16	定数項	2.66			
重相関係数の2乗		.02					

**p<.01

表30 「海外事業者への信頼」に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	348	1.85	.00		.00	.01
	女性	536	1.84	.00			.00
年代	20代以下	135	1.97	.13		.22	.16
	30代	132	1.94	.11			.17 **
	40代	194	1.85	.01			
	50代	231	1.75	-.09			
	60代	192	1.78	-.07			
学歴	小中卒	79	1.81	.04		.05	.03
	高卒	377	1.81	-.02			.04
	専・短大卒	231	1.86	-.01			
	大・院卒	197	1.89	.03			
所属階層意識	上	53	1.79	-.07		.11	.04
	中の上	218	1.84	-.01			.05
	中の中	334	1.84	.01			
	中の下	168	1.87	.04			
	下	111	1.80	-.03			
全体		884					
重相関係数		.17	定数項	1.84			
重相関係数の2乗		.03					

**p<.01

「国内事業者・行政への信頼」尺度については、年代 (.12) 及び所属階層意識 (.10) の偏相関係数が有意であった。

また「海外事業者への信頼」尺度については、年代 (.17) の偏相関係数が有意であった。

数量化 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、多重比較による検定を行なった結果、「国内事業者・行政への信頼」は、20代以下の層が50代の層よりも、また所属階層意識が中の上の層が下の層よりも、高いことが明らかとなった。

また「海外事業者への信頼」は、30代以下の層が50代以上の層よりも高いことが明らかとなった。

以上をまとめると、20代以下の層は、国内事業者・行政、海外事業者のいずれに対する信頼も高かった。

食に関する事業者等への信頼と食に関する安全・危険判断

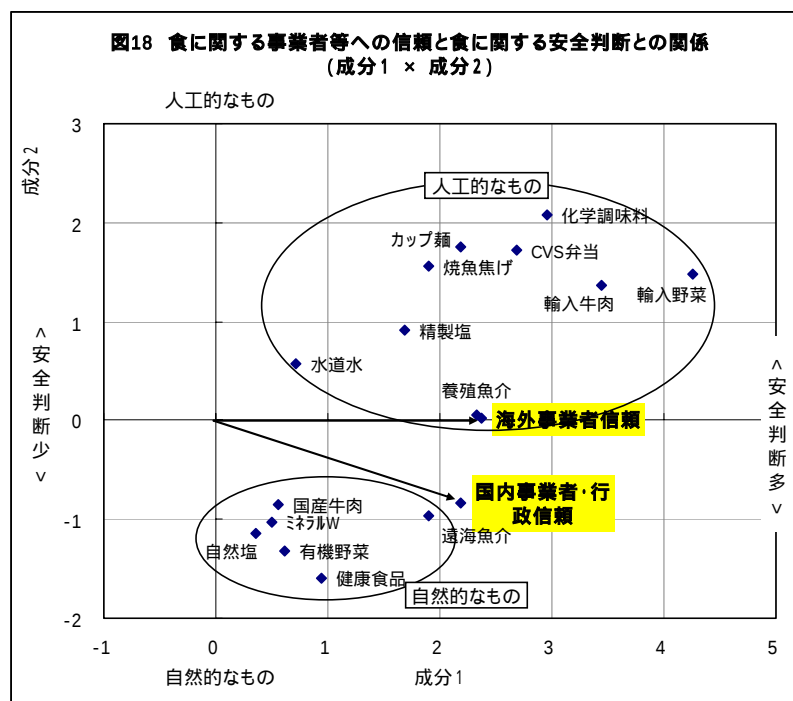
で検討した食に関する事業者等への信頼と、1 - で検討した食に関する安全・危険判断との関係を検討するため、「国内事業者・行政への信頼」及び「海外事業者への信頼」と、安全判断についての数量化 類による成分1 (値が大きいほど安全判断が多いことを示す) 及び成分2、並びに危険判断についての数量化 類による成分1 (値が大きいほど危険判断が多いことを示す) 及び成分2との相関係数を算出した。

表31 食に関する事業者等への信頼と食に関する安全判断・危険判断との関係

	国内事業者 行政信頼	海外事業者 信頼	安全判断の 多さ	安全判断 成分2	危険判断の 多さ	危険判断 成分2
国内事業者・行政への信頼		(887)	(898)	(898)	(902)	(902)
海外事業者への信頼	.47 **		(899)	(899)	(902)	(902)
安全判断の多さ(成分1)	.22 **	.24 **		(939)	(939)	(939)
安全判断成分2	-.08 *	.00	.00		(939)	(939)
危険判断の多さ(成分1)	-.19 **	-.26 **	-.24 **	-.18 **		(944)
危険判断成分2	-.12 **	-.03	.08 *	.40 **	.00	

**p<.01、*p<.05 ()はNを示す。

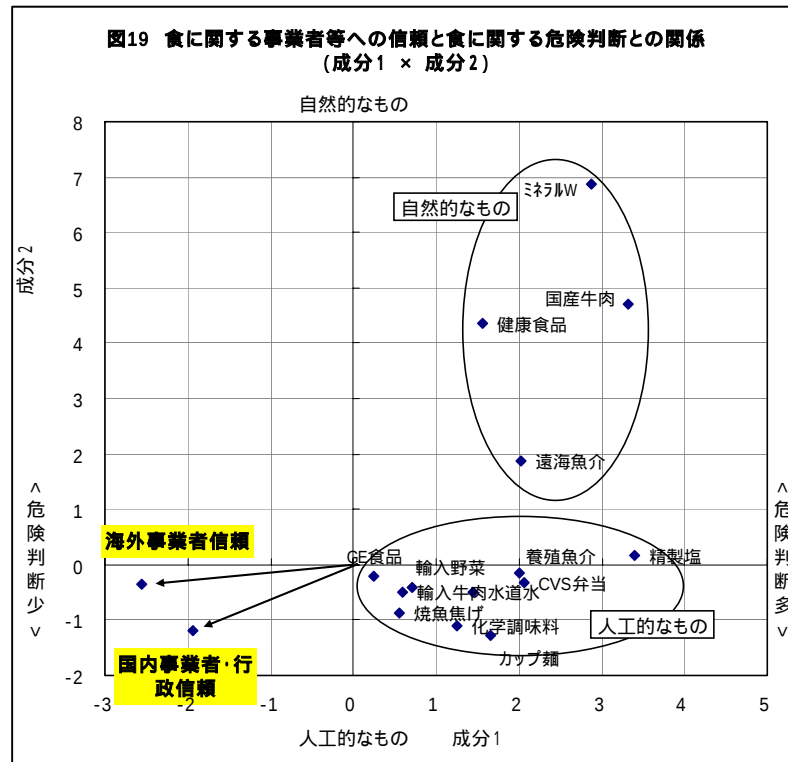
次に、安全判断の成分1 × 成分2のプロット図に、成分1または成分2と有意な相関が認められた「国内事業者・行政への信頼」及び「海外事業者への信頼」の相関係数をプロットした。



相関係数は10倍して表記。図19で同じ。

相関係数及びプロット図から、「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、また「海外事業者への信頼」が高い層ほど、安全判断が多いことが明らかとなった。また「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「自然的なもの」を安全と思っていることが明らかとなった。

また危険判断の成分1 × 成分2のプロット図に、成分1または成分2と有意な相関が認められた「国内事業者・行政への信頼」及び「海外事業者への信頼」の相関係数をプロットした。



相関係数及びプロット図から、「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、また「海外事業者への信頼」が高い層ほど、危険判断が少ないことが明らかとなった。また「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「人工的なもの」を危険と思っていることが明らかとなった。

以上をまとめると、「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、また「海外事業者への信頼」が高い層ほど、安全判断が多く、危険判断が少なかった。

また「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「自然的なもの」を安全と、「人工的なもの」を危険と思っていた。

食に関する事業者等への信頼と食に対する安心・不安感情

で検討した食に関する事業者等への信頼と、1 - で検討した食に対する安心・不安感情との関係を検討するため、「国内事業者・行政への信頼」及び「海外事業者への信頼」と、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」との相関係数を算出した。

表32 食に関する事業者等への信頼と食に対する安心・不安感情との関係

	国内事業者 行政信頼	海外事業者 信頼	科学技術 食品不安	自然系食品 安心
国内事業者・行政への信頼		(887)	(887)	(889)
海外事業者への信頼	.47 **		(888)	(890)
科学技術による食品への不安感情	-.04	-.22 **		(916)
自然系食品への安心感情	.28 **	.16 **	.20 **	

**p<.01 ()はNを示す。

「国内事業者・行政への信頼」は、「自然系食品への安心感情」と有意な正の相関が認められ、「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「自然系食品への安心感情」が

高いことが明らかとなった。ただし、「国内事業者・行政への信頼」は、「科学技術による食品への不安感情」とは有意な相関が認められなかった。

また「海外事業者への信頼」は、「科学技術による食品への不安感情」と有意な負の相関が、「自然系食品への安心感情」と有意な正の相関が、それぞれ認められ、「海外事業者への信頼」が高い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が低く、「自然系食品への安心感情」が高いことが明らかとなった。

以上をまとめると、「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「自然系食品への安心感情」が高かった。また「海外事業者への信頼」が高い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が低く、「自然系食品への安心感情」が高かった。

まとめ

では、食に関する事業者等への信頼の実態を明らかにした。現代日本における事業者等への信頼として、「国内事業者・行政への信頼」及び「海外事業者への信頼」が抽出された。

では、食に関する事業者等への信頼と、食に関する安全・危険判断との関係について検討した。「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、また「海外事業者への信頼」が高い層ほど、安全判断が多く、危険判断が少ないことが明らかとなった。また「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「自然的なもの」を安全と、「人工的なもの」を危険と判断することが多いことが明らかとなった。

では、食に関する事業者等への信頼と、食に対する安心・不安感情との関係について検討した。「国内事業者・行政への信頼」が高い層ほど、「自然系食品への安心感情」が高いことが明らかとなった。また「海外事業者への信頼」が高い層ほど、「科学技術による食品への不安感情」が低く、「自然系食品への安心感情」が高いことが明らかとなった。

4. 食に対する安心・不安感情の規定因

4では、これまで検討してきた内容を踏まえ、「食の安全意識」の2つの様相と考えた食に関する安全・危険判断と食に対する安心・不安感情のうち、食に対する安心・不安感情について、どのような要因で規定されているのかについて検討する。

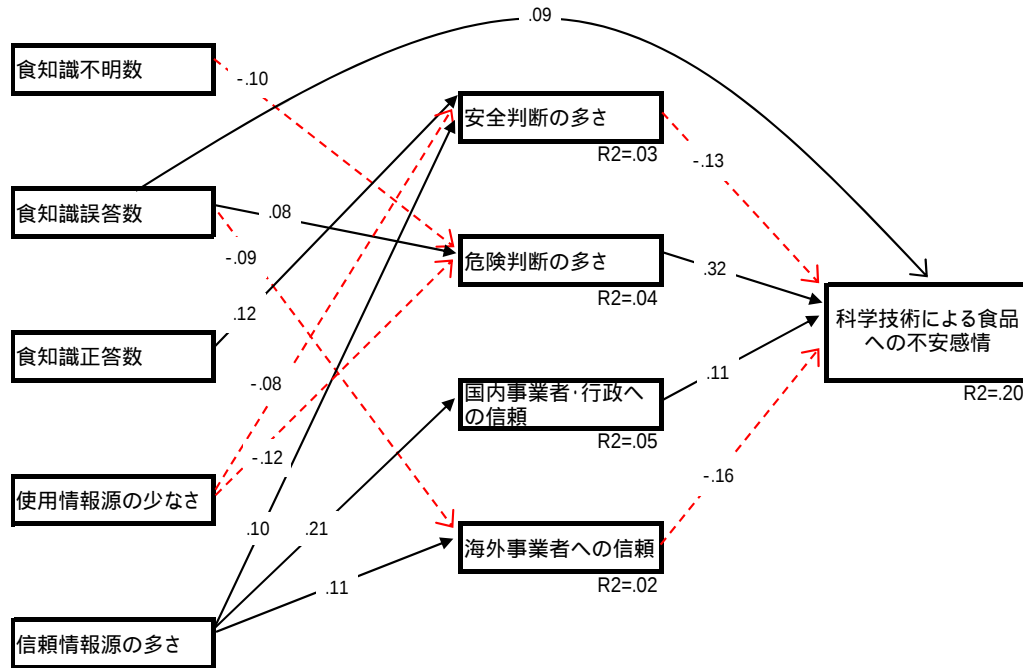
1 - で、「自然的なもの」を安全と判断することと「自然系食品への安心感情」、「人工的なもの」を危険と判断することと「科学技術による食品への不安感情」との間には、それぞれ近い関係があることが明らかになった。

また、2 - 及び 並びに 3 - 及び 3 - で、食に関する安全・危険判断と食に対する安心・不安感情のそれぞれについて、食に関する知識及び食に関する事業者等への信頼との関係を検討したが、そこでも、安全・危険判断や安心・不安感情は、それぞれ、食に関する知識や情報源、あるいは事業者等への信頼と関係していることが明らかとなった。

食に対する安心・不安感情を規定する要因の全体像を検討するため、第1水準に食知識の正答数、不明数及び誤答数並びに「使用する情報源の少なさ（使用する情報源についての数量化 類による成分1）」及び「信頼する情報源の多さ（信頼する情報源についての数量化 類による成分1）」を置き、第2水準に「安全判断の多さ（安全判断についての数量化 類による成分1）」及び「危険判断の多さ（危険判断についての数量化 類による成分1）」

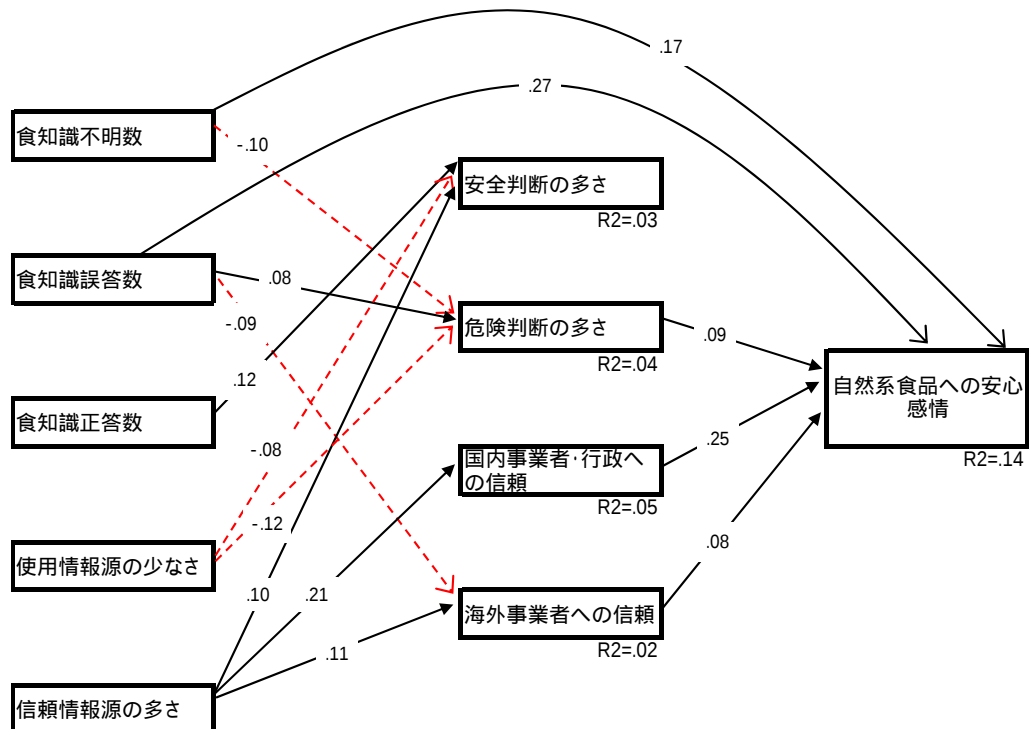
並びに「国内事業者・行政への信頼」及び「海外事業者への信頼」を置き、第3水準に「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」を置いたパス解析を、それぞれ実施した（重回帰分析は変数増加法による）。

図20 「科学技術による食品への不安感情」の規定因



β 係数が正の場合は実線、負の場合は破線の矢印で示している。図 21 で同じ。

図21 「自然系食品への安心感情」の規定因



以下、図 20 及び図 21 で示した各パスのうち主なものについて、検討する。

食に関する誤った知識（食知識の誤答）は、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の両方を、直接高めており、また危険判断を高めることで、間接的にもこれら両感情を高めていた。

一方、食に関する正しい知識（食知識の正答）は、安全判断を高めることを通じて、間接的にしか「科学技術による食品への不安感情」を低めていなかった。また「自然系食品への安心感情」には関係していなかった。

「国内事業者・行政への信頼」は、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の両方を高めていた。一方、「海外事業者への信頼」は、「自然系食品への安心感情」を高めているが、「科学技術による食品への不安感情」を低めていた。

危険判断の多さは、「科学技術による食品への不安感情」を最も強く高めており、また「自然系食品への安心感情」を高めていた。一方安全判断の多さは、「科学技術による食品への不安感情」を低めていたが、「自然系食品への安心感情」とは関係していなかった。

使用情報源の少なさは、安全判断、危険判断の両方を低めており、すなわち使用情報源の多さは、安全判断、危険判断の両方を高めていた。

また信頼情報源の多さは、安全判断だけでなく、「国内事業者・行政への信頼」や「加害事業者への信頼」も高めていた。

以上をまとめると、食に関する正しい知識は、「科学技術による食品への不安感情」を直接的に低めることはできず、安全判断を高めることを通じて、間接的にしかこの不安感情を低めることができないことが明らかとなった。

また、「科学技術による食品への不安感情」、「自然系食品への安心感情」とも、食に関する誤った知識により高められており、科学的な安全・危険に符合する正しい知識に基づく感情とはいえないことが確認されたと考えられる。

また、使用情報源の多さは、危険判断を媒介として「科学技術による食品への不安感情」を高めていた。2 - で示したように使用・信頼する情報源の多い層ほど食に関する誤った知識が多かったことを踏まえると、無批判に様々な情報源を使用する態度は、必ずしも危険判断を減らすことにはつながらないと考えられる。したがって、無批判に様々な情報源を使用するのではなく、情報源を批判的に検討・選択する態度が、危険判断を減らし、ひいては「科学技術による食品への不安感情」を低めることにつながると考えられる。

また、「海外事業者への信頼」は3 - で見たように現代日本では低いが、この信頼は、「科学技術による食品への不安感情」を低めていた。このことから、食に関する不安の低減・解消には、食に関する知識だけでなく、供給者等への「信頼」が関与していることが確認されたと考えられる。

また、信頼情報源の多さは、安全判断だけでなく、「国内事業者・行政への信頼」や「海外事業者への信頼」も高めており、情報源としての信頼と、供給事業者等としての信頼が、密接に関連していることが明らかとなったと考えられる。

なお、今回のパス解析では、仮説的に、安全・危険判断が、「科学技術による食品への不安感情」及び「自然系食品への安心感情」の規定因としているが、このことは、「科学技術による食品への不安感情」や「自然系食品への安心感情」が、逆に安全・危険判断に影響を与えている可能性を否定するものではない。また、どちらか一方が必ず他方を規定するといった直線的な関係ではなく、相互に影響し合っている可能性も考えられる。今後機会があれば、この点について更に検証することとしたい。

III. 調査の結果 - 食品の購買行動

で検討した様々な要因が、具体的な食品の購買行動に影響を与えていると考えられる。では、現代日本における食品の購買行動の実態や、どのような要因が食品の購買行動に影響を与えているかを明らかにする。

1. 食品の購買行動の実態

回答者の食品の購買行動の実態を把握するため、「以下のそれぞれの文章は、あなたが普段食品を買う時の行動にあてはまりますか。次のそれぞれについて、あてはまる程度のところを○をひとつだけつけてください」という4件法(「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」)の質問を行なった。

それぞれの項目について、「あてはまる」に4点、「ややあてはまる」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「あてはまらない」に1点を与えて得点化し、因子分析を行なった。

表33 食品の購買行動に関する因子分析結果(主成分バリマックス法)

項目	自然・安全・健康志向	ブランド・味志向	鮮度・清潔志向	国産・地元志向	手軽さ・見た目・値段志向	尺度得点の平均値
l. 食品は、「自然食品」店で買うことが多い	.80	.07	-.06	.06	.04	1.84
m. 野菜は、「有機栽培」や「無農薬」のものを買うようにしている	.78	.09	.12	.26	-.06	2.39
g. 食品を買うときは、その食品の安全性に関する情報を集めてから買う	.68	.32	.10	.07	-.02	2.25
k. 食品は、添加物が少ないものを買っている	.61	.14	.39	.23	-.25	3.09
n. 食品は、体によい成分が含まれているなど、健康によいものを選ぶ	.55	.16	.31	.21	.10	2.91
f. 食品は、表示で安全性が確認できるものを選ぶ	.52	.36	.34	.15	-.08	3.16
c. 食品は、ブランドにこだわって選ぶ	.14	.70	-.17	.08	.12	2.16
e. 食品は、信頼できるメーカーのものを選んでい	.30	.69	.18	.19	-.01	2.99
d. 食品は、信用できるお店で購入する	.22	.62	.37	.16	-.10	3.24
a. 食品は、味にこだわって選ぶ	.07	.62	.27	-.11	-.01	3.35
i. 生鮮食品は、自分の目で、鮮度などを確認してから買う	.11	.26	.67	.06	-.08	3.66
j. 食品を買うときは、賞味期限や消費期限を確認している	.18	-.04	.66	.05	.09	3.73
h. 生鮮食料品は、清潔なお店で買う	.12	.35	.55	.24	.00	3.61
q. 食品は、国産の製品を選ぶ	.19	.12	.24	.81	-.03	3.07
r. 食品は、地元の製品を選ぶ	.28	.04	.05	.80	.04	2.57
o. 食品は、調理しやすいなど、手間のかからなさ、使いやすさで選ぶ	-.06	.03	.07	.10	.80	2.45
p. 食品は、容器や包装のデザインが気に入ったものを選ぶ	.14	.23	-.37	.06	.63	1.65
b. 食品は、値段が安いものを選ぶ	-.12	-.21	.17	-.33	.57	2.78
負荷量の2乗和	5.45	1.58	1.46	1.19	1.02	
回転後の寄与率(%)	16.86	12.86	11.66	9.79	8.28	
α係数	.84	.70	.59	.73	.42	
尺度平均値	2.60	2.93	3.66	2.82	2.29	

その結果、5因子が抽出された(累積寄与率 59.44%)。第1因子は「自然・安全・健康志向」、第2因子は「ブランド・味志向」、第3因子は「鮮度・清潔志向」、第4因子は「国産・地元志向」、第5因子は「手軽さ・見た目・値段志向」と命名された。それぞれの因子に含まれた項目の得点を単純加算し、項目数で除した値を尺度得点とした(得点が高いほど、当該の感情が高いことを表す)。

各尺度について、Cronbach の α 係数を算出したところ、「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」については、十分な信頼性が確認された（自然・安全・健康 $\alpha=.84$ 、ブランド・味 $\alpha=.70$ 、国産・地元 $\alpha=.73$ ）。

一方、「鮮度・清潔志向」及び「手軽さ・見た目・値段志向」については、十分な信頼性が確認されなかった（鮮度・清潔 $\alpha=.59$ 、手軽さ・見た目・値段 $\alpha=.42$ ）。したがって、この2尺度については、以下の検討の対象からは除外する。

十分な信頼性が確認された「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」について、尺度得点の平均値を算出したところ、「自然・安全・健康志向」(2.60)、「ブランド・味志向」(2.93)及び「国産・地元志向」(2.82)のいずれも、理論的中間点(2.50)を有意に上回っていた。

「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」相互の関係を検討するため、これら3尺度相互の相関係数を算出した。

表34 食品の購買行動相互の関係

	自然・安全・ 健康	ブランド・味	国産・地元
自然・安全・健康志向		(891)	(905)
ブランド・味志向	.53 **		(915)
国産・地元志向	.50 **	.32 **	

** $p<.01$ ()はNを示す。

3尺度の間には、それぞれ有意な正の相関が認められ、これら3尺度は、互いに強く関連していることが明らかとなった。

以上をまとめると、現代日本における食品の購買行動として、「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」が抽出された。いずれも、現代日本では高かった。またこれらは、互いに強く関連していた。

2. デモグラフィック要因との関連

食品の購買行動とデモグラフィック要因との関連について検討するため、「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」を目的変数、性別、年代、学歴及び所属階層意識を説明変数とする数量化 Ⅱ類による分析を、それぞれ実施した（自然・安全・健康： $R^2=.17$ 、ブランド・味： $R^2=.13$ 、国産・地元： $R^2=.13$ ）。

表35 自然・安全・健康志向に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性					.23	.17	.19 **
	男性	350	2.47	-.14			
	女性	540	2.69	.09			
年代					.71	.33	.36 **
	20代以下	135	2.26	-.38			
	30代	131	2.40	-.23			
	40代	191	2.56	-.07			
	50代	229	2.71	.12			
	60代	204	2.87	.33			
学歴					.25	-.03	.11 **
	小中卒	82	2.61	-.20			
	高卒	381	2.64	-.02			
	専・短大卒	232	2.59	.05			
	大・院卒	195	2.54	.06			
所属階層意識					.28	.11	.12 **
	上	55	2.77	.18			
	中の上	225	2.59	.00			
	中の中	338	2.65	.04			
	中の下	163	2.55	-.06			
	下	109	2.48	-.10			
全体		890					
重相関係数		.41	定数項	2.60			
重相関係数の2乗		.17					

**p<.01

表36 ブランド・味志向に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性					.22	.18	.19 **
	男性	352	2.81	-.13			
	女性	547	3.01	.08			
年代					.38	.19	.25 **
	20代以下	135	2.76	-.21			
	30代	134	2.78	-.19			
	40代	195	2.93	-.03			
	50代	232	3.04	.11			
	60代	203	3.03	.17			
学歴					.34	.09	.15 **
	小中卒	84	2.76	-.25			
	高卒	385	2.97	.01			
	専・短大卒	233	2.92	.01			
	大・院卒	197	2.95	.09			
所属階層意識					.40	.20	.19 **
	上	53	3.11	.19			
	中の上	226	3.03	.09			
	中の中	342	2.96	.02			
	中の下	168	2.85	-.09			
	下	110	2.68	-.21			
全体		899					
重相関係数		.36	定数項	2.93			
重相関係数の2乗		.13					

**p<.01

表37 国産・地元志向に対する数量化 類による分析結果

アイテム	カテゴリ	度数	平均値	数量	レンジ	単相関	偏相関
性	男性	363	2.60	-.22	.36	.22	.21 **
	女性	552	2.96	.14			
年代	20代以下	136	2.49	-.33	.66	.26	.28 **
	30代	133	2.62	-.22			
	40代	196	2.77	-.05			
	50代	236	2.88	.06			
	60代	214	3.13	.33			
学歴	小中卒	89	3.04	.03	.08	.11	.04
	高卒	391	2.87	.00			
	専・短大卒	235	2.81	.03			
	大・院卒	200	2.63	-.05			
所属階層意識	上	56	3.04	.23	.37	.11	.12 **
	中の上	228	2.81	.03			
	中の中	348	2.87	.04			
	中の下	169	2.73	-.10			
	下	114	2.68	-.14			
全体		915					
重相関係数		.36	定数項	2.82			
重相関係数の2乗		.13					

**p<.01

「自然・安全・健康志向」については、年代（.36）、性別（.19）、所属階層意識（.12）及び学歴（.11）の偏相関係数が有意であった。

「ブランド・味志向」については、年代（.25）、性別（.19）、所属階層意識（.19）及び学歴の偏相関係数が有意であった。

「国産・地元志向」については、年代（.28）、性別（.21）及び所属階層意識（.12）の偏相関係数が有意であった。

数量化 類による分析で偏相関係数が有意であったデモグラフィック要因について、t検定及び多重比較による検定を行なった結果、「自然・安全・健康志向」については、50代以上の層が30代以下の層よりも、また女性が男性よりも、高いことが明らかとなった。

また「ブランド・味志向」については、50代以上の層が30代以下の層よりも、また女性が男性よりも、高いことが明らかとなった。

また「国産・地元志向」については、50代以上の層が30代以下の層よりも、また女性が男性よりも、高いことが明らかとなった。

また多重比較による検定の結果は有意でなかったが、数量化 類による分析の結果、「自然・安全・健康志向」「ブランド・味志向」「国産・地元志向」のいずれも、年代が高い層ほど、また所属階層意識が高い層ほど高い傾向があることが明らかとなった。

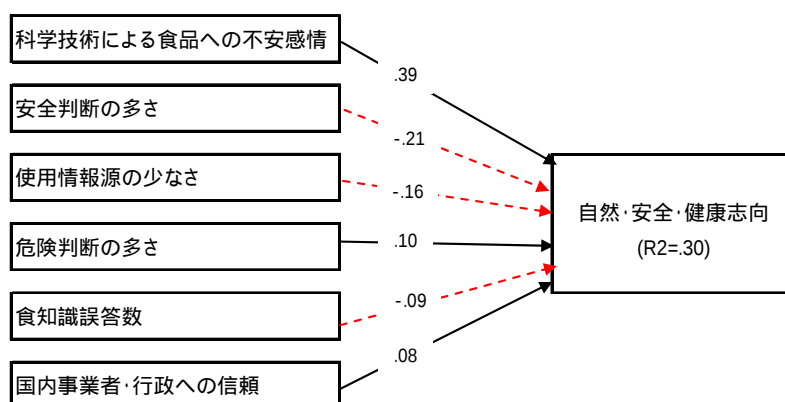
以上をまとめると、「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」とも、女性で高く、また年代が高い層ほど、所属階層意識の高い層ほど高い傾向があった。

3. 食品の購買行動の規定因

食品の購買行動が、どのような要因により規定されているのかを検討するため、「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」を目的変数、以下の各変数を説明変数とした重回帰分析（変数増加法による）を、それぞれ実施した。

- ・ 安全判断の多さ（安全判断についての数量化 類による成分 1）
- ・ 危険判断の多さ（危険判断についての数量化 類による成分 1）
- ・ 科学技術による食品への不安感情
- ・ 自然系食品への安心感情
- ・ 食知識の正答数、誤答数、不明数
- ・ 使用する情報源の少なさ（使用する情報源についての数量化 類による成分 1）
- ・ 信頼する情報源の多さ（信頼する情報源についての数量化 類による成分 1）

図22 「自然・安全・健康志向」の規定因



β係数が正の場合は実線、負の場合は破線の矢印で示している。図 22 及び図 23 で同じ。

図23 「ブランド・味志向」の規定因

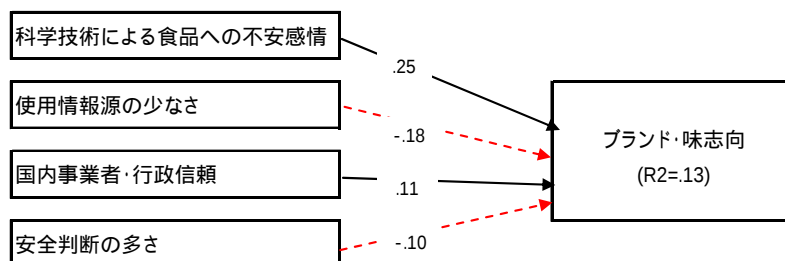
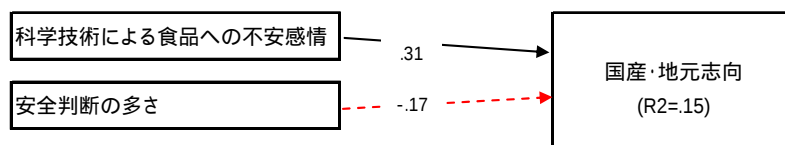


図24 「国産・地元志向」の規定因



「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」、「国産・地元志向」のいずれも、「科学技術による食品への不安感情」により、最も強く高められ、また、安全判断の多さにより低められていた。

まとめ

1 では、食品の購買行動の実態を明らかにした。現代日本における食品の購買行動として、「自然・安全・健康志向」、「ブランド・味志向」及び「国産・地元志向」が抽出された。これらはいずれも現代日本では高いことが明らかとなった。

2 では、食品の購買行動とデモグラフィック要因の関連を検討した。これら 3 志向のいずれも、女性で高く、また年代が高い層、所属階層意識が高い層ほど高い傾向があった。

3 では、食品の購買行動の規定因について検討した。現代日本における特徴的な購買行動である 3 志向のいずれも、「科学技術による食品への不安感情」により、最も強く高くなることが明らかとなった。